

宋時烈の朱子学

—朝鮮朝前中期學術の集大成—

川原秀城

宋時烈（1607-89）は、倭乱（1592-98）・胡乱（1627、1636-37）後の朝鮮朝後期の学术界を代表する朱子学者・思想家である。また後期政治を領導した西人・老論の領袖、政界の理論的指導者としても名高い。

高名な学者・政治家ゆえ、朝鮮朝期における宋時烈の評価はいたって高い。（1）宋時烈は死後、「宋子」と尊称された。朝鮮儒林が自国の学者の姓に「子」をつけて尊称するのは、わずかに李滉・李珥・宋時烈の3名にすぎない。（2）仲冤（1694）後、当時の支配層は書院を数多く建て、宋時烈を配享した。梅谷書院（水原）・考岩書院（井邑）・樓岩書院（忠州）・龍津書院（徳源）・華陽書院（湖西）・盤谷書院（巨濟）・寒泉書院（黄澗）などである。また英祖は宋時烈を文廟に従祀し（1756）、正祖は孝宗廟庭に配享した（1776）。（3）文集の『宋子大全』『尤庵集』にくわえて多数の朱子学研究書が出版された。すなわち、『文公先生記譜通編』『小学諺解』『朱子大全劄疑』『程書分類』『心経附注積疑』『節酌通編』『論孟或問精義通考』などである。また宋時烈の文章の要約も公刊された。正祖が朱熹と宋時烈の相照応する文章を抄して『兩賢伝心録』を編み、李勝愚が『朱書百選』の例にならって『宋書百選』を編んだのがそれである。

だが現在の宋時烈評価は、往時とまったく逆である。（a）史学的には朝鮮朝社会を停滞させた党争を激化した張本人として断罪されることも多く、（b）思想史的には正統と異端を峻別して朱子学の教条化を促進し、その自由な発達を阻害した原理主義者にとらえられ、せいぜい朱熹・李珥の祖述者の位置をあたえられるにすぎない。宋時烈ひいては朝鮮朝17世紀の思想は総体的には不毛であり、思想史的な意義としては16世紀の四端七情論争を継承し18世紀の人物性同異論争を準備する以上の役割はないかのようなのである。

本稿は、（1）宋時烈の朱子学関連業績を分析して、朝鮮朝儒林の評価を再検証し、（2）それを通して、現在の思想史上の鳥瞰図をいくぶん是正することを目論んでいる¹。

1 宋時烈小伝

宋時烈、生没年は宣祖40（1607）年～肅宗15（1689）年。字を英甫、号を尤庵・華陽洞主などという。本貫は恩津である。略歴を記せば、次のとおりである²。

¹ そもそも社会変動に起因する深刻な社会危機にあたっては、政治思想上の対処方法は大きく二つある。一つは伝統的価値を肯定し歴史的文脈を重んじる、保守主義的な統治原理の再編強化であり、他の一つは理性に絶対的な信頼をおく、革新主義的な統治原理の変革である。朝鮮後期のばあい、宋時烈は朱子学の理念を重視しその広範な普及と厳格な適用を追究し、それによって倭乱胡乱後の朝鮮の社会的危機を克服しようとした。

朝鮮朝時と現在の評価の相違は、結局のところ、宋時烈の強烈な朱子学保守主義をどう理解するかにかかっていると思う。すなわち、社会的危機を一定程度克服したことを根拠としてプラス評価するか、あるいは教条化した保守主義がもたらした社会的停滞（近代化の阻害）を根拠としてマイナス評価するかが、両論のわかれるところであろう。だがどちらの評価にも一理があり、一概に一方を是とすることはできない。

² 宋時烈の伝記は、おおむね『宋子大全』所収「(尤庵)年譜」、権尚夏「尤庵先生墓表」、金平黙『尤

〔青少年期〕 宋時烈が誕生したのは、宣祖40（1607）年11月21日。都事の応期の孫、奉事の甲祚の第三子として、忠清道沃川郡九龍村に生まれた。名門の出自ではない。母は善山郭氏、自防の女である。

光海君5（1613）年、宋時烈は始めて学につき、翌年、同宗宋爾昌の家へ赴いて、1歳年長の浚吉（1606-72）と業を共にした。同春堂宋浚吉は同宗同門のみならず、党争を共に戦った一生の盟友である。光海君10（1618）年、父の甲祚は「朱子は後の孔子であり、栗谷は後の朱子である。孔子を学ぶのは栗谷より始めなければならない（朱子後孔子也、栗谷後朱子也。学孔子当自栗谷始）」と論じて、自ら李珥の『擊蒙要訣』を授けた。宋時烈の李珥学研鑽は、家学の影響が大きいといわねばならない。

仁祖5（1627）年、丁卯胡乱のとき、伯兄の時熹が戦死し、翌年、父甲祚も死去した。仁祖8（1630）年、父の三年喪が明けると、正式に李珥の嫡伝と誉れの高い沙溪金長生（1548-1631）に入門した。直接師事した期間は長くないが、李珥より伝わるるところをことごとく受けたという。また金長生の死後は、その嫡子の愼独齋金集（1574-1656）に師事した。

〔仁祖期〕 仁祖11（1633）年9月、宋時烈は生員試に一等（状元）で合格。「名世の大儒となるであろう（当作名世大儒）」と未来を嘱望された。同年10月、敬陵参奉を拝したが、すぐ辞職。ついで仁祖13（1635）年、鳳林大君（1619-59）の師傅に抜擢され、1年余り、その教育を担当した。鳳林大君は後の孝宗（在位、1649-59）である。師弟間の深い情義が後の隆盛を決定したといえるであろう。

だが仁祖14（1636）年、後金は国号を清と改め帝を称し、朝鮮に朝貢と派兵を要求。12月、清兵がにわかに入寇し、丙子胡乱が勃発した。宋時烈は当時、仁祖に随行して南漢山城に避難籠城する。翌年正月、仁祖は清に降伏して太宗に臣従を誓した。これが三田渡の恥辱である。膨大な賠償金にくわえて、昭顯世子と鳳林大君の北行（人質）を強要された。丙子以後、宋時烈は冠履倒易を憤り、家居して度重なる召命にも応じなかった。

〔孝宗期〕 仁祖27（1649）年、孝宗は即位するや、国恥を雪ぐべく、ひそかに北伐を計画。ただちに対清斥和を主張する金尚憲および金集・宋浚吉・李惟泰・權認などを登用し、金自點など親清勲臣勢力を排除しようとした。宋時烈は召命が下ると、ただちに入廷し、進善・掌令・執義などを拝命した。また「己丑封事」を上りて君徳・事務を論じた。その第13事は「政事（軍政）を修め以て夷狄を攘う（修政事以攘夷狄）」であり、尊周大義と復讐雪恥を力説するが、その主張は孝宗の北伐計画と符合し、後その中心人物として抜擢される契機となる。だが翌孝宗1（1650）年2月、金自點一派は新進の士流を除去すべく、朝鮮が新人を進用して北伐を計画していると国情を清に密告。清は重兵をもって国境を制圧し、使者を遣わして詰問し、事はまさに不測に至らんとした。宋時烈を含む士流はみな還郷を余儀なくされた。

孝宗6（1655）年、母郭夫人が死去。孝宗は密使を遣わして自らの意志をひそかに論じ、宋時烈の意思を再確認した。孝宗8（1657）年、宋時烈は母の喪が明けると、「丁酉封事」を上り内修政教・抵御外敵などを論じる。翌孝宗9（1658）年7月、賛善を拝命し、同年9月、吏曹判書に任命され、王の絶対的な支持のもと、1年弱にわたって北伐計画、実質的には民生安定・富国強兵の政策を粛々と実行した。だが孝宗10（1659）年5月、孝宗が突然に昇遐して顯宗（在位、1659-74）が即位。王朝の基本政策が変わり、北伐計画は水泡に帰した。

〔顯宗期〕 宋時烈は孝宗の死後、国政に参画する意志を失い、朝廷を離れ野にあったけれ

庵宋先生事实記』、이중호 『우암 송시열』 (일지사, 2000)などを参照。

ども、先王の遺臣と士林の信望のゆえをもって、莫大な政治的な影響力をもちつづけ、公論はその一言一句によって左右された。まさに山林宰相である。短期間であるが、顯宗から右議政(1668)と左議政(1672)を命じられ、実際に職務に従事したこともある。

だが顯宗期は同時に、党争すなわち執権党と対立党の政治抗争が激化しはじめた時期でもある。宋時烈は西人・老論の領袖として南人と対立し、その結果、毀誉褒貶をくりかえし、波瀾万丈の人生を送った。

最初の深刻な対立は礼説である。孝宗10(1659)年、孝宗が薨じて、仁祖の継妃・孝宗の継母である慈懿大妃は葬礼において、いかなる喪服を着るべきかをめぐって、両党は争訟をくりひろげた。礼訟という。宋時烈・宋浚吉(二者をさして両宋という)など西人は、孝宗は仁祖の庶子(第二子)であるため、期年服を採用すべしと主張し、南人の尹鑰(1617-80)などは、孝宗は仁祖の嫡統を継承するため、三年服を採用すべしと主張した。領議政の鄭太和は国制や明律を根拠として期年説を支持し、廷議は一応、期年説に決着した。だが顯宗1(1660)年、南人の許穆(1595-1682)や尹善道(1587-1671)がふたたび上疏して、宗統の不明を理由に期年説の非を主張し、両宋ほかを弾劾した。許穆や尹善道の弾劾は失敗に帰したが、南人は失敗にもめげず、相継いで上疏して西人の礼説の非を攻撃しつづけた。顯宗15(1674)年2月、孝宗王妃の仁宣大妃の逝去に際して、慈懿大妃の服制をふたたび問題視し、同年8月、顯宗の昇遐、肅宗(在位、1674-1720)の即位にいたって、両宋の「誤礼」「乱統」を糾弾し、ついにそれに成功した。礼訟の勝敗すなわち名分の得失は、南人に大幅な勢力伸張をもたらした、西人に政治的没落をもたらした。

〔肅宗期〕 肅宗1(1675)年1月、宋時烈は遠竄の命をうけ、徳源に流配され、6月、長鬢に改竄された。流配地では高齢(69歳)にもかかわらず、研究に尽力し講学を継続したという。また肅宗5(1679)年4月、巨済に移配された。宋時烈は『春秋大全』隱公4年の条に則って「春秋の法は、乱臣賊子を誅するとき、必ず先にその党与を治める(春秋之法、乱臣賊子、先治其党与也)」といい、主悪(張本)にくわえて従賊も処罰しなければならないと主張した(尤庵先生言行録)が、南人にも同様な主張を展開し、宋時烈を死罪に処し西人を尽除せんとする者が存在した。許穆・尹鑰などである。清南という。

肅宗6(1680)年4月、西人の金錫胄・金万基・金益勲などは南人の逆謀を告発して、南人領袖の許積のみならず事変に無関係の尹鑰も処刑した³。南人はその結果、大挙失脚した。庚申大黜陟あるいは庚申換局という。同年6月、宋時烈は全積の命をうけ、10月、領中樞府事を拝した。宋時烈は朝廷にふたたび召入して、名声は一時に震い、南人を黜陟した勲戚たちと一派を形成した。肅宗8(1682)年、西人勲戚派は宋時烈の黙認(あるいは指嗾)のもと、無辜の南人を誣告し、権勢の独占を企図したが、かえって西人清議派の弾劾をうけ、宋時烈も批判された。勲戚派と清議派の反目の結果、肅宗9(1683)年、西人は老論と少論に分裂した。老論は老練政治家の金寿恒(領相)・金錫胄(右相)・金万基(国舅)・金益勲(御營大将)などからなり、宋時烈を領袖として南人を徹底的に排除せんとした。一方、少論は宋時烈の仮借なき原理主義を嫌った尹拯・南九万・呉道一・朴世采・朴泰輔など青年政治家からなり、穏和な現実主義を標榜した。同年5月、宋時烈は朝廷を離れて帰郷した。

肅宗15(1689)年1月、西人は老論少論を論じるなく、南人系の昭儀張氏の生んだ王子を元

³ 宋時烈のいう春秋の法とは、まさにこのような徹底的な異端の排除を意味するであろう。確かな証拠はないが、宋時烈が尹鑰の処刑に関与したとの疑いを拭いさることはできない。

子に冊封するのに反対し、王の怒りを買ひ、多く罷免された。南人は再執権を果たし、過去の政治的弾圧に報復した。宋時烈は済州に謫され、金寿恒は珍島に流された。これを己巳換局という。宋時烈は同年6月8日、井邑で賜薬をうけ卒した。享年83である。

なお西人南人の党争に最終的な決着がつくのは、肅宗20（1694）年の甲戌換局においてである。肅宗の政権交替策の結果、西人は再執権し、宋時烈などは官爵を回復する一方、南人は決定的な打撃をこうむって、再執権の道を閉ざされた。党争は南人の完全没落すなわち宋時烈の仮借なき異端排除策の勝利をもって終息したのである。

[宋時烈と朱子学] 以上が宋時烈の略歴であるが、波瀾万丈である。まさに比類なき大政治家の、理想や信念に命をささげた一生と称することができるであろう。西人老論の領袖としてのその政治活動は深甚な影響を朝鮮朝後期社会におよぼし、根底からそれを規定したとのべてよいにちがいない。

だが宋時烈の活動は政治の領域にとどまらない。わたしのみるところ、むしろ学術思想の影響の方がより深刻であると思う。以下、その政治理念をささえた朱子学について分析を試みるゆえんである。

2 朱子学基本書の編纂

宋時烈は優れた朱子学研究書を数多く残した。『文公先生記譜通編』（1660）『小学諺解』（1666）『朱子大全劄疑』（1678）『程書分類』（1678）『朱子語類小分』（1679）『心経附注积疑』（1681）『朱文抄選』（1683）『節約通編』（1686）『論孟或問精義通考』（1689）『朱子言論同異考』（1689）『退溪書劄疑』（1689）などであるが、著述時期は興味深いことに、おおむね晩年の肅宗期に集中している。

2.1 顕宗期の著述——記譜通編と小学諺解

2.1.1 記譜通編

宋時烈の朱子学研究書は多く印行されたが、初印の栄誉をになうのは『文公先生記譜通編』6巻である⁴。『宋書拾遺』巻8に転載される崇禎庚子（1660）の自序によれば、朱子の文章は『朱子大全』に備わり、日用の談言は『朱子語類』に詳しいが、朱子自身の出处始末などを知らうと思えば年譜行状をみるのがよいであろう。だが年譜行状には、宋の李方子『朱子年譜』（宣徳6（1431）年徽州重刻本）2巻と明の戴銑『朱子実紀』（正徳8（1513）年刻本）12巻があり、それぞれ別行されるのみならず、たがいに詳略があり優劣をつけがたい。そこで両書をとって相互に校訂し、重複を削り訛舛を正し、欠漏するところがあれば追補し、合して一冊とした、云々という。

『文公先生記譜通編』はすなわち広義の年譜であるが、上記両書を編修して、巻1に道統源流・世系源流・真像・瑩墓図、巻2に年譜、巻3に行状、巻4に廟宅・褒典・讃述、巻5に記題など、巻6に門人・童蒙須知・訓子従学帖を分配したところに書としての特徴がある。同書が当時公刊されたのは、おそらく顕宗が顧命の重臣として宋時烈を尊び、即位の翌年（1660）、それを命じたからであろう。

⁴ 分析に使用したのは、『宋子別集叢刊』（忠北大学校 尤庵研究所 尤庵資料集成 呉 定本化事業 恩津宋氏宋子事業会共編、2008）に収める高麗大学校本の影印であるが、同書は宋時烈の自序を佚している。

『文公先生記譜通編』の影響は大きい。英祖辛卯（1771）刻『朱子大全』に附された附録巻4の「年譜原本」は、『文公先生記譜通編』の引く李方子『朱子年譜』をそのまま援用しているが⁵、そのことによってもうかがうことができるにちがいない。

2.1.2 小学諺解

第二の印本『小学諺解』は朱子撰『小学』の朝鮮語訳である。古ハングルで記されている。『宋子大全』所収「年譜」（以下、「尤庵年譜」と略称）によれば、顯宗7（1666）年10月、顯宗は元子の教育のため、宣祖丁亥本『小学諺解』の改訂を宋時烈に命じ、宋時烈は宋浚吉などの協力をえてその任を果たした。草本の完成後あまり時をおかず印行されたことは間違いない。

徐有榘『鏤板考』や李山海「（宣祖丁亥本）小学諺解跋」などによれば、朝鮮朝における『小学諺解』の歴史は次のように整理することができる。すなわち、（a）『小学諺解』初刻本は、中宗13（1518）年、己卯士禍に潰えた趙光祖などが王命を奉じて撰解したが、己卯諸賢は文学を自任する者が多く、字義を捨てて注解を恣にしたところが多い。中宗戊寅本という。（b）二刻本は、宣祖20（1587）年、李山海（東人）・鄭澈（西人）などによって作成された。儒臣たちは明の程愈『小学集説』にのっとして中宗戊寅本を改撰し、逐字解的な訳書を作った。宣祖丁亥本である。（c）だが宣祖丁亥本は、宋時烈などにとって「頗る訛誤の多い」ものにすぎない。漢文による『小学』解釈の最終バージョン、李珥『小学集説』（1579）の説と逕庭が多かったからである。『小学諺解』三刻本すなわち顯宗丙午本が作成されたゆえんである。

徐有榘『鏤板考』によれば、中宗戊寅本はつとに亡失し、正祖期に行われたのは改撰を経た宣祖丁亥本と顯宗丙午本であるという。宋時烈の朝鮮語訳は初学者を中心に読みつがれたのである。

2.1.3 顯宗期の著述

総じて宋時烈は、朱子の著述の一言一句を深く考察するだけでなく、過去の朱子研究をよく整理吸収し、それを総合しようとする傾向がきわめて強い。顯宗期の著作『文公先生記譜通編』『小学諺解』などはまさにその典型であろう。中国書であれ朝鮮書であれ、先行研究をみごとに折衷総合している。その集成型の学問スタイルは、一生を通じて一貫しわずかの变化もない。

だが顯宗期における著述は肅宗期のそれと性格を異にするところも多く、宋時烈の著述としてはむしろ例外に属するであろう。著述の動機が純粋な学術上の当為に根ざしており、宋時烈を特徴づける強烈な政治的情念が表面にまったく現れてこないからである。

2.2 肅宗期の著述——朱子大全割疑・心経附注釈疑など

2.2.1 党争と著述目的

宋時烈による朱子学関連書の著述出版は肅宗初期に急増し、賜死の直前にいたるまでハイペースを維持したが、その著述目的自体は単純明快である。「尤庵年譜」崇禎51（1678）年72歳8月の「朱子大全割疑成」の条に、「先生嘗曰」としてその著述目的がみえ、同じ目的は賜死の年、崇禎己巳（1689）春の「朱子大全割疑序」にもほぼそのまま記載されている。最晩10余年の学術研究を動機づけたのはまさにその信念と判断すべきであろう。

宋時烈が人生の最晩年、万難を排して学術研究に従事し、多数の朱子学研究書を物した理由

⁵ 『朱子大全』附録巻4の「年譜原本」には小注があり、「従記譜通編所載本」という。

は大きく二つある。上記資料ほかによれば、(1)一つは学術上の要請である。研究の当為がしからしめたものであり、誤謬の訂正や遺忘の防止を直接の目的としている。(2)他の一つは政治上の要請である。宋時烈は理想社会の実現には朱子学の普及が欠かせないと信じ、朱子学の普及のため獅子奮迅の努力をした。

宋時烈という。比来、斯文の厄は極まれり。南人理論家の尹鑰は朱子を攻斥して余力を遣さず、尹宣拳・拯父子は終始、尹鑰を党助して、斯文に災厄をもたらしている。甲寅(1674)の秋、尹鑰は金澄監司の家を訪ねて朱子批判をしたあげく、「吾が功は禹の下に在らず」と豪語したと聞くが、その禍は洪水猛獣よりはなはだしい。だが世人は朱子書を知らないゆえそれを好まず、その結果、異端の言辞の乱すところとなっている。世人に朱子書を読むことを知らしめれば、邪説は自ずと消滅するであろう。諸賢の力を借りて真摯に努力すれば、究極のところ、聖学を明らかにし世教を扶ける一助になるにちがいない、と。朱子学の正当性は、朱子学を信奉する宋時烈にとって自明の前提である。宋時烈の自任する使命ないし責務とは、朱子学の普及を通して「天理を明らめ人心を正し、異端を闢け正学を扶ける(明天理正人心、闢異端扶正学)」(権尚夏・墓表)とところにある。宋時烈が老骨に鞭し、孜々として著述に励むゆえんである。

2.2.2 朱子大全割疑と節酌通編

宋時烈は当時尹鑰などの朱子学を相対化する新たな学風の流行に対して強い危機感を感じ、その危機克服を目的として朱子学の正統性の証明・普及を企図し、数多くの研究書や入門書を物したわけであるが、以下、肅宗期の著作についてその具体的内容を分析したい。最初は『朱子大全』関連書である。書名をあげれば『朱子大全割疑』『節酌通編』『朱文抄選』などという。宋時烈の著作は李滉など、朝鮮朝碩学の先行研究と深い関係があるため、まずもって朝鮮朝における『朱子大全』研究史を一瞥しなければならない。

〔前史〕 朝鮮朝における『朱子大全』研究史である⁶が、(a)中宗38(1543)年癸卯、中宗は校書館に命じて『朱子大全』(朱子大全100巻、目録2巻、統集11巻、別集10巻)を印出頒行した。当時、『朱子大全』の流通は広くなく、目睹した学者も少なかったからである。李滉(1501-1570)自身も中宗の印行によって始めて同書の存在を知ったという。

(b)李滉は『朱子大全』を知るやただちに購入してそれを耽読した。特にその書札には啓発されるところが多かったが、分量が龐大であり(本集の巻24～巻64、統集の巻1～巻11、別集の巻1～巻6)、内容にも深淺があるため、尤も学問に有用な部分を抜きだして一書を編修することを企図し、家人・門人などに囑してそれを完成した。『晦庵書節要』14巻である。「退溪先生年譜」は草稿の完成を明宗11(1556)年に記し、自序は朱子書札の約1/3程度を収録したことを伝えている。

(c)李滉自序に附す奇大升識語によれば、『晦庵書節要』は刊行に際して目録と註解を添付し、書名を改めたという。『朱子書節要』20巻がまさにそれである⁷。だが門人たちはただ『朱子書節要』を刊行したのみではない。李徳弘や李咸亨などは『朱子書節要』の難解な個所を質

⁶ 本テーマについては、三浦国雄「『朱子大全割疑』をめぐる一朝鮮朱子学の側面」(森三樹三郎博士頌寿記念東洋学論集、1979)、藤本幸夫「朝鮮における『朱子語類』—それは如何に扱われたか—」(朝鮮学報78輯、1976)、藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究(集部)』(京都大学学術出版会、2006)、李相夏「(朱子書節要記疑・朱子書節要講録)解題」(奎章閣資料叢書儒学篇；朱子書節要記疑・朱子書節要講録、서울大学校奎章閣、2004)などを参照。

⁷ 『朱子書節要』のばあい、節要注が新たに附せられたことも重要である。

問し、李滉の一時の口述や書札の解答をまとめて注釈書を編修した。『朱子書節要記疑』あるいは『朱子書節要講録』という(図1⁸)。編修当時から、注釈の内容にはいまだ李滉の手校を経ないものもあり、名理が躓き事証が誤り、本旨を失するところも一つでないという(趙穆などの)批判もあったというが、朝鮮史上最初の『朱子大全』注釈であり、その意義は量りしれない。漢文の注釈にくわえてハンゲルの注釈も附されている。

(d) 光海君14(1622)年、李滉の再伝弟子、鄭経世(1563-1633)は『朱文酌海』16巻を編纂した⁹。女婿¹⁰の宋浚吉「朱文酌海跋」(1653)によれば、同書は編纂の目的が『朱子書節要』の補完にあり、その選に漏れた『朱子大全』中の「尤も大体に関し受用に切なる」文章の抜粋を企図したものである。書札を含む封事・奏劄・雑著・序・記・跋・行状などを収録しており、『朱子書節要』とは輿衛(車輿・衛士)や羽翼の関係にある、という。印本が現存している。

〔朱子大全劄疑〕 宋時烈は上記の先行研究を利用しつつ、『朱子大全』に関連する『朱子大全劄疑』『節約通編』『朱文抄選』などを編纂したが、最初に成果をあげたのは『朱子大全劄疑』である¹¹。『朱子大全劄疑』は『朱子大全』の注釈書であり、本集100巻・続集11巻・別集10巻よりなる。巻数は『朱子大全』のそれと対応している¹²。

「尤庵年譜」は肅宗4(1678)年「八月、朱子大全劄疑(粗ぼ)成る」と記し、「宋時烈は乙卯(1675)ごろから『朱子大全』の注釈作業に没頭した。隨時記録し、朝夕孜孜として少しも止めなかった(自乙卯以後、専心大全、隨手劄録、晨夕孜孜未嘗少輟)」と説明を補足する。また権尚夏「尤庵先生墓表」は『朱子大全劄疑』『程書分類』について「長髯に流謫されたと

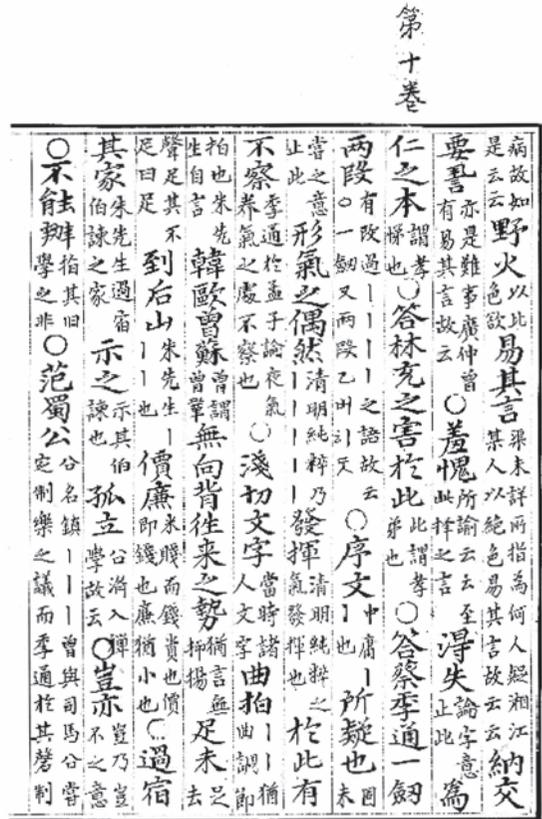


図1. 『朱子書節要記疑』巻7の書影

⁸ 図1は奎章閣本『朱子書節要記疑』巻7の書影である。『朱子書節要』巻10の注釈であり、『朱子大全』巻44に対応している。『奎章閣資料叢書儒学篇、朱子書節要記疑・朱子書節要講録』(서울大学校奎章閣、2004)から引用。

⁹ 『愚伏集』附録「(愚伏)年譜」によれば、「壬戌天啓二年(1622)九月、編次朱文酌海」とある。

¹⁰ 鄭経世は政治的には南人に属するが、西人の宋浚吉に娘を嫁がせている。当時の西南の党争について必要以上に深刻に考えてはならないであろう。

¹¹ 本テーマについては、三浦国雄「『朱子大全劄疑』をめぐって—朝鮮朱子学の一側面—」(森三樹三郎博士頌寿記念東洋学論集、1979)などを参照。

¹² 分析には『朱子別集叢刊』(忠北大学校 尤庵研究所 尤庵資料集成 叢刊 定本化事業 恩津宋氏朱子事業会共編、2008)に収める保景文化社本の影印を使用した。

きの著作である（長髻時所述也）」とのべている。

(a) 長髻における『朱子大全』の注釈作業であるが、自序に「記疑を續し、酌海を通釈して、因りて以てその余に及ぶ（続記疑、通釈酌海、而因以及於其余）」とあり、『朱子書節要記疑』の続成→『朱文酌海』部分の注釈→両書に未収録の部分の注釈と進んだことは疑えない。また注釈のとき、金寿恒（1629-89）などにも自説を質議した。金寿恒の訂誤補漏は精博を極めたと、宋時烈は自序に記している。(b) 粗成（1678）後には厳密な校正を企図し、門人の権尚夏（1641-1721）・金寿恒の胤子の昌協（1651-1708）・李喜朝（1655-1724）などにそれを命じた。権尚夏や金昌協の年譜には複数回その校正作業のことがみえている。

(c) 宋時烈は死が間近に迫る肅宗15（1689）年2月、遺言をもって権尚夏・金昌協ほかに商量修改を委嘱した。『朱子大全割疑』の修改はかくして、宋時烈の死（1689）後も継続された。『寒水齋集』『寒水齋先生年譜』によれば、権尚夏は宋時烈の死後、修校の事を主宰し、精力をそれに傾注した。金昌協は問目をもって来質したが、権尚夏はその「長を集め短を去りて、その当を得るを務め」た。金昌協の歿におよぶや、権尚夏が独りその作業に任じた。肅宗41（1715）年、「朱子大全割疑の修校、畢る」。廷臣の建白によって、芸館で印行された、という。『朱子大全割疑』は師弟の涙ぐましい努力のもと、開始から40年をへて完成したのである。

『朱子大全割疑』は『朱子大全』の全著作を網羅する注釈書であるが、特に注意すべきは（1）『朱子書節要』にみえる小字の注解（節要注）と（2）『朱子書節要記疑』に収める注釈（記疑）が同書にすべて収録されていることである。

たとえば図2¹³は『朱子大全割疑』巻44の第1葉であるが、双行小字の部分が『朱子大全』巻44の「答蔡季通」第1～第3書の注釈にほかならない。陰刻大字の「一板」「二板」は当時流行の『朱子大全』（10行18字）の板数（丁数）を示し、第1板・第2板のことである。大字の「一劍兩段」は答蔡季通第1書の原文を示すが、下注小字の「記疑」は『朱子書節要記疑』（所収注釈）を意味し、「記疑」以下に李滉門下の注釈を引く¹⁴。「前日之書」の下注「節要注」は、『朱子書節要』の注解をさす。また大字の「三条」から「註凡物止中也」の部分は、もともと『朱子書節要』に収録されていない。李滉の選に漏れた文章であれば、記疑はない。下注がただ宋時烈自身の注釈のみからなる理由である。一方、大字の「序文」以下はすべて下注に記疑の文を引く。図1と対照すれば、『朱子書節要記疑』の注釈がもれなく引用されていることは明らかであろう。

宋時烈は李滉門下の記疑説や節要注をすべて一字も動かさず引用する。解釈が自説と同じときだけでなく、驚くことには見解が異なるときにも記疑説や節要注の引用を止めようとはしない。記疑説や節要注につづいて自説を展開して、末尾に常套句「記疑説（または節要注）はおそらく正しくないであろう（記疑説恐未然）」をおいて考察を終えている。同様な編纂執筆方針の『心経附注釈疑』自序はその特殊な執筆法の採用理由を説明して、「先行研究を尊敬することを重んずる以上、そうせざるをえない（尊長前輩之義、不得不如是也）」というが、『朱子大全』注釈書の編纂執筆についてもおそらく同様に解してよいであろう。すなわち、（1）『朱子大全割疑』の形式——李滉の原本において敢えて一字も動かさないこと、（2）自序の発言——「記疑を續し」て同書を作成したとのべることからいって、『朱子大全割疑』執筆の狙いは、

¹³ 図2は『宋子別集叢刊』（忠北大学校 尤庵研究所 尤庵資料集成 定本化事業 恩津宋氏朱子事業会共編、2008）に収める保景文化社本の書影である。

¹⁴ 引用記疑には、ハンゲル表記を漢文表記に改めたところがある。



図2. 『朱子大全割疑』巻44の書影

李滉訓詁の補完を企図したところにあるということができないにちがいない¹⁵。

『朱子大全割疑』の影響はきわめて大きい。宋時烈が臨終におよび、高弟弟子に完書の商訂を遺命するや、朝鮮朝の朱子学者たちは競ってその余意を推し、衍を節し欠を補おうとした。閔遇洙 (1694-1758)・任聖周 (1711-88)・徐有榘 (1764-1845)・洪奭周 (1774-1842)・金邁淳 (1776-1840) などである¹⁶。極めつきは、李恒老 (1792-1868)・竣 (1812-53) 父子が宋時烈の『朱子大全割疑』に数十家の注釈を添えて『朱子大全割疑輯補』70冊を編纂した (1850)。やや大部すぎる嫌いはあるが、『朱子大全』の注釈を調べるには便利である。同書を称して朝鮮朝の『朱子大全』注釈史を締めくくる最後の著作とのべても決して過言ではないであろう。

〔節約通編〕 一方、『節約通編』36巻は、書名どおり李滉の『朱子書節要』20巻と鄭經世の『朱文酌海』16巻の合帙本である。巻1～巻20が『朱子書節要』、巻21～巻36が『朱文酌海』からなり、内容は原書と変わらない。また二書に未収録の『朱子大全』の重要文章を収めた『節約通編補遺』7巻がある¹⁷。徐有榘『鏤板考』は通編・補遺を一括して「本朝宋時烈編」とし

¹⁵ 三浦国雄は『朱子大全割疑』が李珥説をほとんど引かず、引くのはわずか1個所にすぎないことを指摘し、注釈の客観性・脱党派性を強調している (前掲論文731頁)。

¹⁶ 詳しくは、『朱子大全割疑輯補』「序」「書目」などを参照されたい。なお今回分析には、韓国学資料院による延世大学校蔵『朱子大全割疑輯補』の影印本 (아름출판사, 1985) を使用した。

¹⁷ 本テーマについては、姜文植「〔節約通編〕解題」(奎章閣資料叢書儒学篇：節約通編、서울大学校奎章閣, 2008) を参照。また分析には、奎章閣本と国立中央図書館本 (宋子別集叢刊, 2008) を使用した。

ている¹⁸。

先行研究（姜文植）などによれば、(a) 時期は定かでないが、宋時烈は相当早い時期から『朱子書節要』と『朱文酌海』の合本（通編）に注釈を添えた朱子文集の注本（正文帯注本）を構想したらしい。(b) だがその構想が具体化しはじめたのは『朱子大全割



図3. 『朱子書節酌通編』巻1の書影

疑』粗成（1678）後のことである。すなわち、肅宗9（1683）年、宋時烈は李師命の要請をうけて『朱子書節要』『朱文酌海』の「補遺」を作成。これが『節酌通編補遺』である。翌年、忠清道觀察使の李端錫が『朱子書節要』『朱文酌海』と『朱子大全割疑』の合刊を計画。宋時烈もそれに応じて『朱子大全割疑』の該当箇所を送付した。国立中央図書館蔵『朱子節酌通編』41巻（写本）がその段階の草稿にあたりと考えられる（図3¹⁹）。『朱子書節要』（巻1～巻20）『朱文酌海』（巻21～巻36）『節酌通編補遺』（巻37～巻41）からなり、『朱子大全割疑』の注釈を1行さげて記録している。まさに注本である。

(c) 肅宗12（1686）年1月、金寿興は『節酌通編』の刊行を建議し、その刊行論議が本格化した。朝廷における議論の結果、(1) 注本は看閲には便であるが、巻数が膨大になる、(2) 注本に未添付の『朱子大全割疑』の注釈は刊行をみない、(3) 原詩10巻が収録されない、など問題点が指摘され、問題点を解決するには、(4) 『節酌通編』『節酌通編補遺』『朱子大全割疑』をそれぞれ単行するのがよいであろう、との結論に達した（宋子大全・巻53・答金起之・丙寅4月14日）。かくして肅宗の裁可をえて三書が刊行されたのである。

『節酌通編』の出版経緯からすれば、宋時烈が李滉と鄭經世の節要（ひいては学問）にことのほか信頼を寄せていたことは確かである。すなわち宋時烈が李滉などの節要本に全面的に依拠する以上、それは先行の視点を自らの視点と基本的に同じととらえ、先行の研究成果を自らの研究に融通しようと考えていたことを示している。すくなくとも異なる学派の異質の研究成果とは考えていないことは間違いのないところであろう。

甲戌換局（1694）以後、『節酌通編』は経筵にたびたび利用された。肅宗のとき3回、景宗のとき3回、英祖のとき33回などという。影響の巨大さをみることができよう²⁰。

¹⁸ 出版経緯からすれば、従来、『節酌通編』の編者をもって宋時烈とした理由がわからなくもない。

¹⁹ インターネット上に公開されている国立中央図書館蔵『朱子節酌通編』である。書影は冒頭の巻1「与延平李先生書」であるが、『朱子大全割疑』の注釈が添えられている。

²⁰ 以上の論説は概略、姜文植前掲解題による。

〔朱文抄選〕 『朱文抄選』 4巻は、『朱子大全』から聖学（帝王学）に尤も切要なところを抜粋したものである。「尤庵年譜」によれば、肅宗9（1683）年8月、筵臣侍読用の教材として、『朱子大全』から全体大用をみ、聖心に黙契し、政治云為の間に補益する文章を抄訳せよと、王命がくだり、宋時烈は『朱子書節要』と『朱文酌海』から若干篇を択び、もって進めたという。

現伝本（印本）²¹は巻1が書であり『朱子書節要』から引かれ、巻2の封事と巻3の封事・奏劄と巻4の議状・説・序が『朱文酌海』から引かれている。『朱文抄選』は進講用の教材であるが、両班のための『節酌通編』と同様、李滉学との学術距離は近く、親和性はいたって高い。

2.2.3 程書分類と朱子語類小分

宋時烈は朱子学研究、特に『朱子大全』の注釈に最も精力を傾注したが、くわえて『二程全書』『朱子語類』も重んじた。その結果が『程書分類』『朱子語類小分』などである。

〔程書分類〕 『程書分類』30巻は、『二程全書』の分類重編本である。編纂出版の経緯を簡単にまとめれば、以下のようになっている。²²

すなわち、（a）長鬢流謫中（1675-78）、宋時烈は『二程全書』の編次錯乱を厭い、その分門類編を企画。（b）肅宗4（1678）年、書名を『程書分類』と定めた。草本の粗成である。（c）庚申換局（1680）後、崔邦彦・李喜朝・権尚夏など、門人が分授して草本を整頓する。（d）草本が完成。肅宗15（1689）年2月、権尚夏に後事を託したとき、「君と凡例を議定したいと思ひ、浄本を華陽に送置した（欲与君議定凡例、送置浄本於華陽矣）」とのべている。浄本が存在することからいって、草本の完成はそのすこし前に溯るであろう。（e）草本の完成後、成晩徴・権焯などが修校に従事した。（f）肅宗43（1717）年、李喬岳・閔鎮厚などが『程書分類』の印出を計画。（g）肅宗44（1718）年12月、権尚夏が「程書分類跋」を執筆。——編纂の完成にはまさに40余年を費やしている。

『二程全書』は、版本によって巻数にやや出入があるものの、概略すれば（1）『河南程氏遺書』25巻、附録1巻、（2）『河南程氏外書』12巻、（3）『河南程氏文集』12巻、遺文1巻、附録1巻、（4）『周易程氏伝』4巻、（5）『河南程氏経説』8巻、（6）『河南程氏粹言』2巻をあわせて刊行したものである。所収書は性格や構成がそれぞれ異なり、閲読が難しいだけでなく、『遺書』『外書』は門下諸人の記述になる二程の語録であって、編録は散漫雑出し、内容が一定していない。内容を整理した研究書が求められるゆえんである。

『程書分類』²³は「考閲に便なる」ことを目的として、『二程全書』の文章を「各段別出し、分門編入した」ものである。巻1～巻10は易・書・詩・春秋・礼記・周礼・儀礼・孝経・論語・大学・中庸・孟子に関する内容をあつかひ、記載順は経書成立のそれにしている。巻11～巻16は理気・性理・学・聖賢・歴代・治道・異端である。編次はほぼ『性理大全』に倣っている。巻17～巻30は明道文集・伊川文集・文集拾遺である。各条の脚下には、遺・外・粹などと原書名を附記している。

『程書分類』の整理が一定の水準に達していることは、同書の構成を一瞥するだけでも自ず

²¹ 分析に使用したのは、『朱子別集叢刊』（忠北大学校 尤庵研究所 尤庵資料集成 呉 定本化事業 恩津宋氏朱子事業会共編、2008）に収める国立中央図書館本の影印である。

²² 主に「尤庵年譜」と権尚夏「程書分類跋」による。

²³ 分析に使用したのは、『朱子別集叢刊』（忠北大学校 尤庵研究所 尤庵資料集成 呉 定本化事業 恩津宋氏朱子事業会共編、2008）に収める国立中央図書館本の影印である。

と明らかであろう²⁴。『性理大全』目録などを根拠した階層的な内容構成によって、調べたい文章を簡単にみつけることができるからである。

〔朱子語類小分〕 『朱子語類小分』140巻は、『朱子語類』の分類重編本である。印刷に附されなかったため、序文も跋文もなく、編纂の詳しい経緯はわからない。わずかに「尤庵年譜」「尤庵先生墓表」などによって、(a) 巨濟流謫中(1679)、日夕、孫の疇錫と『朱子語類』を対勘。(b) 同年12月、「朱子語類小分、(粗ぼ)成る」。(c) 庚申換局(1680)後、李喜朝などが草本を修正。(d) 肅宗15(1689)年2月、権尚夏に「検校」を委嘱。(e) 宋時烈の死後、浄本が完成。権尚夏が出版を模索した(寒水齋集・巻19・与湖南伯)、ということができにすぎない。

『朱子語類小分』は、現伝本(写本)²⁵を分析するかぎり、『朱子語類』のもつ語録ゆえの欠点(1) 記事錯雑、(2) 煩複過多を緩和克服しようと、その錯雑を整え、その煩複を刪り、類に随って分を移したものである。具体的な編纂作業のべれば、標題を参照しながら、問答の内容を検証する。錯雑したところを整頓し、煩複したところを削除する。また問答の主題が変わったときには、その意味上の境界に「○」字をかいて前後を別の節とし、記事を細分化(小分)する。こうまとめることができるであろう。その大分を小分するところが、本書の最大の特徴である。『朱子語類小分』重編の狙いは、『朱子語類』自体がすでに分門の書であるが、それを再分門し、読みやすくするところにあるということができであろう。

2.2.4 心経附注釈疑

宋時烈はひろく朱子学関連書を編纂したが、驚くことには、李滉学の核心中の核心『心経附注』にも注釈書を残した。『心経附注釈疑』4巻がそれである。

〔心経附注と李滉〕 『心経』1巻は、南宋の真徳秀(1178-1235)撰。経書などにみえる聖賢の論心格言を編集し、諸家の議論を注記したものである。『書経』1章、『詩経』2章、『周易』5章、『論語』3章、『中庸』2章、『大学』2章、『礼記』楽記3章、『孟子』12章、および周敦頤2条、程頤1条、范浚1条、朱熹3条よりなっている。冒頭に引く「人心道心章」、すなわち『書経』大禹謨の「人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中」が、朱子学心論の核心、いわゆる十六字心法である。原注は朱熹「中庸章句序」を引いている。

『心経附注』4巻は、明の程敏政(?-1499)撰。程朱以下大儒の言を採摭して、『心経』の説を補輯したものである。程敏政自序によれば、『心経』の本文は真徳秀に出るが、原注には『西山読書記』など、後人の雑入した可能性が高いところもないわけでない。閑居の暇に、謹んでこの参校をなした、という。「附注」以下にみえるのがまさにそれである。たとえば「人心道心章」のばあい、经文1条および原注1条に対して、朱熹6条、陳埴1条、黄榦1条、真徳秀1条、王柏1条を附している。

朝鮮朝における『心経附注』の受容は、中宗(在位、1506-1544)初期、趙光祖(1482-1519)や金安国などにはじまり、李滉にいたって本格化したという²⁶。李滉が『心経附注』を入手し

²⁴ このことは中国の上海辞書出版社が2006年、同書の点校本を出版したことによってもうかがうことができる。その書誌情報を記せば、[中国] 程頤程頤著 朱熹編・[朝鮮] 宋時烈分類重編・[韓国] 徐大源校勘標点『程書分類』(上海辞書出版社、2006)である。

²⁵ 分析に使用したのは、『朱子別集叢刊』(忠北大学校 尤庵研究所 尤庵資料集成 叢刊 定本化事業 叢刊 恩津宋氏朱子事業会共編、2008)に収める文忠祠本の影印である。

²⁶ 成百曉訳注『心経附注』(伝統文化研究会、2002)の解題を参照。



図4. 『艮齋集』続集巻3の書影

たのは、中宗18（1523）年23歳あるいは中宗28（1533）年33歳のことである。李滉は入手後一生にわたって、神明のごとくそれを尊信し、それを端緒として心学淵源を探索した。李滉の学は『心経附注』によって開かれ、『朱子大全』によって完成した、云々といわれることが多い²⁷が、それは李滉学の構造を一言でよくのべているであろう。また李滉は伝統の初学教育、すなわち初学者は最初に『小学』を学ばねばならない——を大きく変革し、初学用工の書として『小学』でなく『心経附注』を課した。根本原理に通じれば爾後諸多の事項は勞せずしてよく通悟することができると思ったからである²⁸。それは李滉学の独自性と画期的なところをよく示しているであろう。

李滉は自ら『心経附注』を真摯に研究しただけでない。たびたび門下に講義し、門弟たちとそれについて筆談した。門弟たちは講義ノートほかにもとづきながら、難字句の語釈などを添えて『心経附注』の注釈書を作成した。代表的なものが李徳弘『心経質疑』や李咸亨『心経講録』などである。『心経質疑』は李徳弘の文集『艮齋集』続集巻3に収められている（図4²⁹）。だが門弟編の注釈書であれば、親受とはいえ伝録をへるため、解釈は伝授者の力量に左右され玉石混淆とならざるをえず、結果的に李滉の真説か疑わしいところもないわけでない。書のもつこの性格は『朱子書節要記疑』と同じである。

〔心経附注釈疑〕 『心経附注釈疑』（心経釈疑と略称）4巻は、『心経附注』の注釈書である。

編纂出版の経緯は『朝鮮王朝実録』や「尤庵年譜」「寒水齋先生年譜」などによれば、おおむね以下のようなものである。すなわち、（a）肅宗7（1681）年7月27日、副提学の李翊相が上疏して、『心経附注』注釈書の刊出のため、宋時烈に命じて李滉門下の注釈書を釐補することを請う。上これを可す。（b）同年8月11日、華陽で校進の王命を拜受。（c）権尚夏ほかを呼び、

²⁷ 高橋亨「李退溪」二学説（高橋亨朝鮮儒学論集、2011）などを参照。

²⁸ 高橋亨「李退溪」七退溪の門人（高橋亨朝鮮儒学論集、2011）を参照。

²⁹ 『韓国文集叢刊』51（民族文化推進会、1990）所収本から引用。

校正に従事。なお権尚夏の華陽到着は8月19日である。(d) 9月6日、校正終了。(e) 9月12日、校本を送付。(f) 9月18日、『心経附注积疑』および「進心経(附注)积疑笱」を進献。(g) 9月19日、検討官の宋光淵が同書を印出して講筵の参関に備えることを請う。上これを可す。

『心経附注积疑』はまた出版後、数奇な運命を経た。(h) 肅宗15(1689)年、己巳換局、南人執権。印行諸本と板子を取聚し、焚尽。(i) 肅宗20(1694)年、甲戌換局、西人再執権。筵臣の言によってまた刊行を命ずる。——『心経附注积疑』は講筵時の参考書として編まれたため、政争の煽りをまともにうけたわけである。

『心経附注积疑』は党争の煽りをまともにうけたが、それは西人が政治的に李滉門下の『心経附注』注积書の修正刊行を企画し、それに成功したからである。宋時烈の自序はそれについて朝廷西人の李翊相・金万重・朴世采たちが「先後して力を致した」とのべ、「礼曹正郎金涑伝諭後書啓」は先師の金長生から独自の心経解釈を聞いたことを伝えている。当時、李珥学統は李滉学統と同じく『心経附注』をいたって重視していたのである。

『心経附注积疑』現伝本(図5³⁰)を分析すれば、その退栗合璧——李滉学与李珥学の精華の会集総合的な性格には驚かざるをえない。宋時烈の自序はいう。『心経附注』の注积書はもと李滉の門より出た。記録者は門下の李徳弘与李咸亨である。李滉はまた二家の記すところを合わせて、「財酌證正」した。原本は「端的無疑」といわねばならない。だが現本はしばしば伝録を経るため、訛舛を重ねることがないことはない、と。宋時烈(の公式見解)によれば、現本の訛舛や疎略はみな伝写に起因するものであって、李滉元本には誤謬などないのである。事実、宋時烈は李徳弘の外孫の金万佺から李滉真本をえて、自説と比較したが、「李滉元本においては、敢えて一字も動かしていない」。自ら妥当な解釈ないし李滉学の精華と考えたところについては、転写を事としたことは図5を図4と比較すれば自ずと明らかであろう。

宋時烈は李滉学を継承しただけではない。「疎漏のところがあれば、聖教によってこれを補い(有疎漏処、則依聖教補之)」、「支蔓なところがあれば、聖教によって刪去し(有支蔓処、則依聖教刪去)」、「改めるべきところがあれば、これを改めた(有可改処、則改之)」(校正凡例)。修正したのは単に語句上の差誤のみではない。ひろく性情理気の説にもおよんでいる。特に顕著な例をあげれば、巻2の孟子人皆有不忍人之心章の「四端」の注积である。李滉の四端七情理気互発説(原説)にくわえて李珥の四端七情気発理乘一途説、および李珥を拡張した自説を記している。李珥学のみごとな展開とのべることができるであろう。宋時烈の四端説に

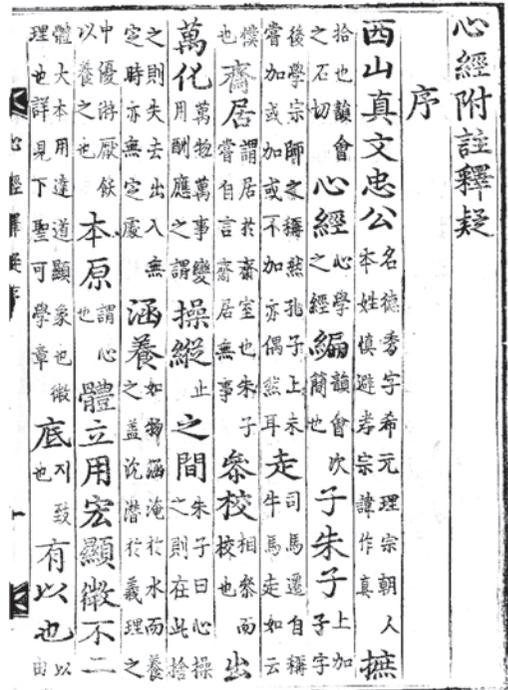


図5. 『心経附注积疑』序の書影

³⁰ 分析に使用したのは、東京大学文学部漢籍コーナー小倉文庫本(活字本)である。

については、次章で詳しく論じる。

2.2.5 論孟或問精義通考

宋時烈は濟州流謫中、『論孟或問精義通考』を編修した。これを称して、朝鮮朝が朱子学を完全に自家葉籠中の物としたことを示す象徴的な事件といつてよいであろう。

〔論孟精義と朝鮮〕 その学術史上の意味を明らかにするには、『論孟精義』と『論孟集注』『論孟或問』の関係から論述をはじめなければならない。周知のごとく、南宋孝宗の乾道8(1172)年、朱子は『論語』『孟子』に関する二程・張載・范祖禹など11家の説をとって、『論語精義』20巻『孟子精義』14巻を編次した(論孟精義はその合称)。同じく淳熙4(1177)年、朱子は『論語精義』『孟子精義』の精粹を約し、諸家の説を融会して『論語集注』10巻『孟子集注』7巻を撰成した(論孟集注はその合称)。またその去取した理由を明らかにすべく、問答態でもって『論語或問』20巻『孟子或問』14巻を編纂した(論孟或問はその合称)。

だが『論孟精義』は集注と或問の完成後、資料集の地位に墮ち、無用の糟粕として棄てられたかのごとき感がないわけではない。また『論孟集注』は臨終にいたるまでしばしば朱子自身によって修改されたが、『論孟或問』は重編を経なかったため、或問の説は時として集注や語類のそれと矛盾することもある。

宋時烈「論孟或問精義通考序」によれば、『論孟或問』は朝鮮朝が書をえて刊行することすでに久しいけれども、『論孟精義』は我朝に伝わっていない。わたしはほとんど40年近く『論孟精義』を渴求したが、いまだ入手していない。清都燕京の諸市に問いあわせても、舌人はつねに遍求するも得ずをもって解となすのみである、という。朝鮮後期になっても、朱子書は完全には朝鮮に伝わっていないのである。

〔論孟或問精義通考〕 『論孟或問精義通考』34巻は、宋時烈の立綱分目編次による『論孟或問』と『論孟精義』の重編本である。

簡単に編纂出版の経緯を記せば、次のごとくまとめることができる³¹。すなわち、(a) 肅宗11(1685)年11月、弟子の李選が冬至使兼謝恩副使として清に出使し、燕京の書肆で『朱子遺書』を購入。(b) 翌年³²、宋時烈は『朱子遺書』中に『論孟精義』を発見。喜躍に勝えず、ほとんど寝食を忘る。『中庸或問』が逐条の下にそれぞれ『中庸輯略』の該当箇所を附すことになり、『論孟或問』逐句の下に『論孟精義』を附入することを企画。(c) 肅宗15(1689)年閏3月、『論孟或問精義通考』を編修。また権尚夏に手紙を出して勘正を依頼。(d) 肅宗46(1720)年、外孫の権以鎭が安東府使となって、同書を印行。ただ洛中の編書者が原書中、緊要の語の漏れるのを惜しみ、原章中に添録した結果、印本には宋時烈の立綱分目編次と異なるところがあるという(権尚夏・跋)。

宋時烈の編修作業は『論孟精義』説を考拠し、手ずから標識をくわえ、『論孟或問』逐条の下に編附したものであって、編修目的は『論孟或問』の欠略を補い、『論孟精義』と通考することによって読者に朱子取捨の権衡を知らしめるところにあるという(尤庵年譜)。宋時烈はただ『論孟或問』があって『論孟精義』がないのは、まさに訟案に供辞がなくただ判辞のみがあるのに似ているとのべる(答李択之)が、その比喩はまさに肯綮にあたっている。事実、現

³¹ 主に『宋子大全』の「尤庵年譜」・巻72「答李択之(丙寅5月3日)」、『論孟或問精義通考』の宋時烈序・権尚夏跋などによる。

³² 宋時烈の論孟或問精義通考序は『論孟精義』の発見を丁卯(1687)におくが、正しくは李選宛の書簡「答李択之(丙寅5月3日)」にしたがって丙寅(1686)としなければならない。

伝本³³は『論孟或問』の逐条ごとに『論孟精義』の当該箇所を添えており、或問によって集注各章の問題の所在を定め、精義と読み進む構造になっている。宋時烈のみるところ、論語孟子の学は訟案が供辞と判辞からなるごとく、精義と或問・集注からなるべきであって、その一を欠くことはできないのである。宋時烈が自序において、通考すれば『論孟或問』にいわゆる某説の是なるゆえん、某説の疑うべき理由は掌をさすがごとしと自賛するのは、あるいは当然のことかもしれない。

朝鮮朱子学史に思いを馳せたとき、中国書の輸入や朝鮮書の重刊と、學術の飛躍的な発展の相互連関に喫驚した経験の持ち主はかならずや多いにちがいない。わかりやすい例をあげれば、(1) 高麗末期、『四書集注』ほかをえて朱子学がはじめて興起し、(2) 中宗期、『朱子大全』『朱子語類』を重刊して、李滉学などが新たな高みに達したことが一番であろう。いずれも學術史上画期的な事件に数えてよく、それをもって時代を区分することも不可能でない。個人的な見解ではあるが、『朱子遺書』の輸入と宋時烈学の確立も、前二者と同じような意味をもっては思えてならない。宋時烈のばあい、確かに『朱子遺書』の存在がその研究を一気に飛躍させたわけでないが、それは朱子学を完全に自家薬籠中の物としたことをみごとに示している。宋時烈の朱子学研究の網羅的集大成的な性格を象徴する事件といえることができるにちがいない。

2.2.6 朱子言論同異考と退溪書劄疑

宋時烈學術の性格について考えるとき、未刊の書の分析も軽んじてならない。『朱子言論同異考』『退溪書劄疑』などがそれである。

〔朱子言論同異考〕 『朱子大全』巻130に「朱子言論同異考」がある。「朱子言論同異考」は書名どおり、朱子の言論の同異矛盾について分析考察したものである。わずか13葉にも満たない小編であるが、着想に優れ、後世の學術発展の方向を定めた傑作に数えることができるであろう。まさに虎は死して皮を残すである。

宋時烈はその自序(1689)において、著書の目的を次のように記している。すなわち、『朱子大全』と『朱子語類』には、「一得一失、両存すべからざる者」も含めて)言論の異同はもとより多い。だが異同はただそれのみではない。二書それぞれの中にも、異同は厳然として存在する。けだし『朱子大全』は著作時期に初晩の分があり、『朱子語類』は記録者が一人でないからである。わたしは二書を読むにあたって、気をつくところがあれば書きうつし、もって考論の参考に備えた、と。宋時烈言外の意を忖度すれば、朱子の理論は完全無欠かつ絶対無謬でなければならない。だが実際には記録によって異同がある。朱子学者は当然、その理論上の不整合を調整しなければならない——おそらくこうであろう。内容の詳細は後述する。

宋時烈はまた、同書の完成を未来の同行の士に、「苟も同志の士の続して業を卒えることあれば、則ち学者窮格の事において、或いは補う所なくんばあらず(苟有同志之士、続而卒業、則於学者窮格之事、或不無所補)」と嘱した。実際、景宗4(1724)年、再伝弟子の韓元震(1682-1751)が宋時烈の志を続成した³⁴。『朱子言論同異考(別名、朱書同異考)』6巻である。このばあい「続成」とは宋時烈の原文をそのまま転写し、自らの考証を添付することを意味している。宋時烈書は筆記ノートであるが、韓元震書は項目にわけて朱子説の同異を逐一分析す

³³ 分析には影印本『論孟或問精義通考』(驪江出版社、1986)を使用した。

³⁴ 韓元震の自序は1741年に書かれている。

る。卷1の理気・理・陰陽・五行・天地・日月・鬼神・人物之性・心、卷2の性・仁義礼智信・情・心性情・仁敬・誠忠・才徳・人倫・学・大学、卷3の論語・中庸、卷4の孟子・易・書、卷5の詩・春秋・礼・周子書・程子書・張子書・治道、卷6の科挙・聖賢・異端・論人・史伝・文字類・先生出処・先生語黙・(附)論孟或論輯註がそれである。宋時烈の宿願は死後、権尚夏→韓元震と再伝して達成されたのである。

最も注目すべきは、「朱子言論同異考」が理論解析において朱子自身の学説主張の整合性を問題にしたことである。換言すれば、宋時烈は朱子学の第一義的特性をその無謬性におきながら、朱子書における言論の異同すなわち理論的齟齬の存在を是認したわけであるが、同書のばあいそれは理論上の整合性を証明し、絶対性を保持する方法を模索したことと同義といえることができるであろう。

〔退溪書割疑〕 一方、『退溪書割疑』について知りうることは少ない。(1)「尤庵年譜」によれば、肅宗15(1689)年2月、宋時烈は権尚夏に後事を託したとき、「退溪書」について「割疑」を作りはじめた、現在わずか1巻を書いたにすぎないといい、書跡を授けその完成を委嘱した。(2)尹鳳九「南塘韓公元震行状」によれば、韓元震の著作に『朱書同異考(朱子言論同異考)』『退溪書疏釈(退溪書割疑)』がある。いずれも「宋時烈がそれを始めるもいまだ卒らず、権尚夏がかつて続成を命じたところである(尤庵始之未卒而先師之所嘗命者也)」と説明。(3)韓元震『南塘集拾遺』巻4には実際に「退溪書割疑」が収められている。だが著書の経緯については何の説明もない。

上記説明を総合すれば、『南塘集拾遺』の「退溪書割疑」がまさに宋時烈本の続成本の可能性が高いが、そう断定することもできない。証拠があまりに少ないからである。ただ書の形式については、宋時烈のそれをいくぶん維持しているとみてもよいであろう。韓元震書の形式と酷似する宋時烈の割疑書「退溪四書質疑疑義」(1677)が実際に残っているからである。

韓元震書の内容や形式からいって、『退溪書割疑』とは李滉書簡(退溪書)の諸見解中、疑問のあるところを引き、自説を展開したものにとらえるべきであろう。だが執筆の目的が「退溪四書質疑疑義」や韓元震書と同じく李滉謬説の是正にあれば、李滉説の誤謬を逐一指摘しそれを厳しく批判したものであろうし、『朱子大全割疑』や「宋子大全随割」と同じく語句の精確な注釈があれば、李滉説を一部顕彰したものかもしれない³⁵。証拠がない以上、最終的な判断を控えたい。ただ宋時烈が理論解析の矛先を李滉の書簡まで伸ばしたことは、朝鮮朱子学史上きわめて重要であろう。李滉のばあい、学説が最も顕著にあらわれるのは書簡が一番だからである。

2.3 朝鮮朝前中期学術の集大成

以下、個別例の分析を総じて、宋時烈による朱子学基本書の編纂の基本的な特徴、ひいてはその朱子学研究の学説史上の地位について考えてみたい。宋時烈は多数の有用な朱子学基本書を完成したが、その基本書の特徴、具体的には帰納演繹の特徴からして、宋時烈の朱子学研究や朱子学書編纂を称して、朝鮮朝前中期学術の集大成といえることができるであろう。

³⁵ 看書雜録には「退溪之学、最為無弊、而其作処与朱子不同。豈余所見之妄耶。今世士友多讀其文集、然亦難看。故余嘗欲為註釈、始功而未果焉。或有繼而成之者則善矣」という。

2.3.1 朱子学基本書編纂の特徴

〔朱子一尊の学〕 権尚夏は「尤庵先生墓表」のなかで、宋時烈の朱子一尊主義に言及し、宋時烈の「朱子の後、義理は大いに備わり、余蘊はない。後学はただまさに朱子を尊信し、極意講明しなければならない。聖たるも賢たるも、それ以外にない。書を著し後に垂れんと欲するのは、妄であり贅である（朱子之後、義理大備、靡有余蘊。後学只当尊信朱子、極意講明。為聖為賢、不外於是。必欲著書垂後者、妄也贅也）」を引いて、その多数の著作の目的がみな程朱の旨の闡発にあったことを明らかにしている。

権尚夏の指摘は、宋時烈の研究の特徴をみごとにいいあらわしている。宋時烈は二程朱子の学に心酔しそれを絶対化し、孜孜として有用な朱子学基本書を編み、程朱書に精密な注釈をくわえる。論理的整合性を追求し、理論内部における些細な矛盾も許さない。だが朱子の言論は実際には、矛盾し破綻するところが多い。宋時烈はその事実を正確に認識している（「朱子言論同異考」を想起せよ）にもかかわらず、朱子学の厳格かつ排他的なフレームワークからわざわざ飛びだそうとはしない。尹鑄と比較すればその性格は明白であろう³⁶。

〔広範な朱子学研究〕 宋時烈「沙溪金先生行状」によれば、金長生は門下生に教育を施すにあたって、厳格に『小学』『朱子家礼』→『心経』『近思録』→四書五経の階梯をとって、学ぶべき書を授けたという。門下の宋時烈は恩師の階梯を完遂すべく、あらゆる階梯にわたって研究書を作成した。

金長生の階梯に即応する朱子学研究書は、先に分析した『小学諺解』『心経附注釈疑』『論孟或問精義通考』のみではない。礼学書には『経礼問答』『尤庵先生礼説』などがある。二書は『朱子家礼』を含む礼学関連の書簡を抜粋編纂したものであり、内容は『宋子大全』所収のそれと同じである。『近思録』には金長生の学友、鄭曄（1563-1623）の『近思録積疑』を校訂し、問題点を修潤損益した。宋時烈の後序（1661）がある。易学には『尤庵易説』があり、『韓国經学資料集成』（成均館大学校大東文化研究院、1989-98）に収録されている。

李滉の開拓した朱子の文集・語類に関する研究についても、宋時烈は真摯に実行した。『朱子大全割疑』『朱子語類小分』『朱文抄選』『節約通編』などがその代表的な成果である。そのほか『文公先生記譜通編』『程書分類』『朱子言論同異考』ものこっている。宋時烈の研究は李滉・李珥・金長生など先賢たちにくらべて広い領域をカバーしているといわねばならない。

〔強烈な政治的動機〕 宋時烈の朱子学基本書のうち、『朱子大全割疑』『程書分類』は長髻流謫、『朱子語類小分』は巨濟流謫、『論孟或問精義通考』は濟州流謫中の作品である。肅宗代、党争敗北期に粗成された編纂書がその大多数を占めている。

宋時烈による朱子学基本書の編纂は先に分析したごとく、倭乱胡乱後を特徴づける朱子学の相対化、権威喪失に対処したものとのべるべきであろう。宋時烈は学術研究上、朱子学の正統性の証明と普及、「天理を明らめ人心を正し、異端を闢け正学を扶けること」を自己の責務として追究したが、その最終的な目標は道学政治、すなわち思想統制→朱子学一尊による社会的な危機克服にある。徹底した学術研究の根幹には春秋大義、強烈な異端排斥の政治意識が存在するといわねばならない。まさに党争期の思想家の政学一致の典型である。

〔先行研究の総合折衷〕 宋時烈は朱子学を絶対化し、その規範をこえて自由に思考することを許さない。自ら主体的に哲学・思想を追求せず、真理の闡明者朱子の深意を探ること、厳

³⁶ この点については、三浦国雄「十七世紀朝鮮における正統と異端」（朝鮮学報第百二輯、1982）を参照されたい。

密な哲学史・思想史風の研究に終始した。追究するのは朱子学内部の論理的整合性である。

宋時烈の研究レベルが高いのは、帰納と演繹の質と量を確保する——膨大な資料を解析して一般法則を発見し、法則間の論理的整合性を考察し、一般法則から結論を推論し、結論の客観性を獲得するためである。宋時烈は帰納演繹の至難の作業を完遂するのに、膨大な資料を解析した良質の先行研究を実にうまく折衷総合する。わかりやすい例をあげれば、『文公先生記譜通編』は『朱子年譜』と『朱子実紀』の合璧本であり、『論孟或問精義通考』は『論孟或問』と『論孟精義』の合璧本である。所定の目的を達成するのにすべて自力によらず、優れた先行書を校訂編修して論理的整合性を確保している。また『節約通編』は『朱子書節要』と『朱文酌海』の合帙本であり、『朱子大全割疑』は『朱子書節要記疑』の補完本、『心経附注积疑』は『心経質疑』の補完本である。宋時烈の朱子学研究書には、先行研究を利用しないものがほとんどないといえることができるであろう。

〔李滉学の補完〕 宋時烈は先行研究を折衷総合して自己の朱子学基本書を編纂したが、編纂中、顕著にあらわれるのは李滉学の重視、具体的には李滉訓詁への全面的な依存である。これは李珥訓詁が表面上さほどみえないのとよき対照をなしている。

事実、『節約通編』は『朱子書節要』と『朱文酌海』の合帙本、『朱文抄選』は『朱子書節要』と『朱文酌海』の節略本、『朱子大全割疑』は『朱子書節要記疑』の補完本、『心経附注积疑』は『心経質疑』の補完本と説明することができ、宋時烈が依拠したのはいずれも李滉学の重要な研究成果にほかならない。また『心経附注积疑』をのぞいては、李珥説を強く主張してはいない。

2.3.2 学説史上の地位

本章を終えるにあたって、宋時烈の朱子学基本書編纂における先行研究の重視、特に李珥以上の李滉尊重について朝鮮朱子学史上どう解釈すべきか、考えてみたい。

〔朝鮮朱子学史〕 そもそも李滉は朝鮮朝前期の朱子学を集成して、前代とは異質の学術レベルに到達した。それゆえ、李滉の前後をもって朝鮮朱子学史を画期することができる。この点については朝鮮思想研究者の見解はほぼ一致している³⁷。一方、宋時烈は李滉以来の学術的成果を徹底的に吸収補完して、前代を凌駕する基礎研究を広範に展開し、学術訓詁の確実性を一挙に飛躍させた。これが前節の分析結果である。このことからいえば、宋時烈による朱子学基本書編纂とはすなわち朝鮮朝前中期学術の集大成を意味するとのべてもよいであろう。

〔道統与李滉尊重〕 顕宗肅宗期の熾烈な党争や宋時烈の強烈な政治的動機を前提にすれば、李滉尊重の命題、ひいては朝鮮朝前中期学術の集大成説はそれと相容れず、論理的に正しいといえないかのごとくである。

だが宋時烈は「看書雜録」（宋子大全・巻131）において「退溪の学は最も無弊となす」と称賛するだけではない。同じく「沙溪金先生行状」では、金長生が朝鮮の道統（東方道学の統）について、

鄭夢周は高麗末に絶学を宣揚し、金宏弼は朝鮮初にその墜緒を継承したが、結果的には微言は著明にならず、至道は暢達しなかった。趙光祖は誠明の学をもって君民の責に任じ、立朝施設は盛大になり、観るべきところも多い。遺風余韻は、よく百世を聳動するであろう。その後、時として一二の優れた儒賢もあらわれたが、いまだ卓然として道を伝える者

³⁷ 画期については、高橋亨「李退溪」序言（高橋亨朝鮮儒学論集、2011）を参照。

はない。李滉は群賢斬伐の余をうけ、よく斯文を興起することをもって己の任とした。経伝に沈潜し、義理を講明し、一己の謙徳を守り、後学を未来へ導いた。その功は大といわねばならない（論東方道学之統、以鄭圃隱夢周、倡絶学於麗季、金寒暄宏弼、繼墜緒於我朝、而微言未著、至道未暢。靜菴趙先生光祖、以誠明之学、任君民之責。立朝施設、蔚有可觀。其遺風余韻、足以聳動百世矣。自是厥後、間有一二儒賢、挺生名世、而未見有卓然伝道者。退溪先生、承群賢斬伐之余、能以興起斯文為己任。沈潜経伝、講明義理、守一己之謙徳、牖後学於来世。其功可謂大矣）

と断じ、また李滉学の称賛につづいて、だが「明白純粹、洞徹無滓、真知実践、聖門宗旨をえたこと」などにいたっては、李珥に勝る者はない³⁸、と明言したことを伝えている。金長生については宋時烈も朝鮮道学の淵源と先哲の本末をもって、鄭夢周・金宏弼→趙光祖→李滉→李珥と一直線にとらえるのである³⁹。

金長生の道統観を前提とすれば、宋時烈はただ李珥→金長生の嫡伝のみならず、あわせて李滉の三伝弟子でもある。李珥（1536-84）は長寿ではなく、訓詁学的研究が絶対的に不足するからには、不足を補うため、嫡伝以外の朝鮮諸賢の研究まで参照範囲を広げねばならないのは理の当然であろう。自らも学統を継ぐ朝鮮諸賢の先行研究、特に李滉訓詁学の学習継承（あるいは研究吸収）の必要性がそこにはある。朱子学基本書編纂における朝鮮朝前中期学術の集大成の性格は、結局のところその道統観に由来するとのべることができるにちがいない。

3 理気論の研究

宋時烈の学術著作を分析した結果、顕著に李滉学重視、朝鮮朝前中期学術の集大成的な性格がみられたが、現在の分析結果は宋時烈思想を特徴づける理気論にもそのままあてはまるであろうか。特に李滉の理気論与李珥の理気論は周知のごとく、真っ向から対立しまつたく相容れない。宋時烈が李珥→金長生の嫡伝として李珥学を顕彰する傾向が強いことからいえば、李滉の尊重や理気論の集成など、ありえないかのようである。宋時烈のばあい、訓詁と哲学は相互に矛盾すると判ずべきであろうか。以下、この点について考察したい⁴⁰。

3.1 李滉与李珥の理気論

宋時烈の理気論を明らかにするためには、あらかじめ李滉与李珥の理気論の概要とその相違点を知らなければならない⁴¹。

³⁸ 原文「至如明白純粹、洞徹無滓、真知実践、得聖人之宗旨、考之言行而無瑕、措之事業而合時宜、出処以正、進退以義、任繼開之丕責、寿道脈於無窮者、惟吾栗谷先生一人而已」。

³⁹ 宋時烈自身も「自（鄭夢周）後道学漸明、以至晦退栗牛則道学大明於与矣」とのべている（雑録）。なお金長生の道統観は、畿湖学派の共通認識に発展したらしい。田愚（1841-1922）は『五賢粹言』を編集したが、「五賢」とは趙光祖→李滉→李珥→金長生→宋時烈のことである。

⁴⁰ 斯文学会編『尤庵思想研究論叢』（太學社、1992）などを参照。特に李楠永「尤庵의 哲學思想」（宋子学論叢、忠南大學校、1994）に啓発されたところが多い。

⁴¹ 李滉与李珥の理気論研究は、朝鮮思想研究者にとって永遠のテーマであり、見解が異なることも多い。論述にあたっては、拙稿「星湖心学—朝鮮王朝の四端七情理気の弁とアリストテレスの心論」（日本中国学会報第56集、2004）—退溪と栗谷の四端七情理気論を参照利用した。

3.1.1 李滉の理気論

〔四端七情理気互発説〕 四端七情の定義をのべれば、「四端」とは、人のもつ道德感情のこと。『孟子』公孫丑上篇にみえる「仁の端」の「惻隱の心」と「義の端」の「羞惡の心」と「礼の端」の「辭讓の心」と「智の端」の「是非の心」をいう。一方、「七情」とは、『礼記』礼運篇にみえる「喜」「怒」「哀」「懼」「愛」「惡」「欲」のこと。七情の特徴は誰もが「学ばずして能くす」ところにある。

李滉の四端七情論は、朱熹の理気二元論のフレームワークのもと、人間の道德感情とは何か、道德感情は何に由来するかを解明しようとしたものといえる。だが退溪による心性論展開の経緯をみれば、李滉一人の創作というよりは、高峰奇大升（1527-72）との8年にわたる議論を通じて深化されており、高峰との共同成果というほうがより実情に近い。

李滉は明宗14（1559）年、「四端は理の発、七情は気の発（四端理之発、七情気之発）」と互発説を主張した（答高峰論四端七情第一書）。『朱子語類』卷53に輔広の記録がみえ、朱熹自身が「四端是理之発、七情是気之発」と断じるからである。

李滉はいう。理と気は事物の中、相須って体をなし、相待って用をなす。もとより無理の気もなく、無気の理もない。だが理と気は存在の次元を異にし、相雜することはない。理と気からなる情にあっても、同中に異があり、さしていうところがそれぞれあって、四七の別がそこにはないことはない（二情論）。だが「情に四七の分があるのは、なお性に本然の性と氣質の性の異があるようなものである（情之有四端七情之分、猶性之有本性氣質之異也）」。性に理と気の区別が認められる以上、情を理と気に分属して四端理発、七情気発とのべうことは疑いをいれない。

四端は仁義礼智の性に発した（内出の）ものであり、理気の場合ではあっても、感情の実質を主導しているのは理であり、その機能主体をさしては、理を主とする（主理）といえる。一方、七情は外物が身体に接触して心中の感動をひきおこし、心の外郭から発出した（外感の）ものである。理もそこに存在しないわけではないが、外物と接触する際、感じやすく最初に動くのは、形気であり、気に勝るものはない。七情の実質的な機能は気が担当している（主気）とのべうゆえである。それゆえ四端は、心中にあって純理であり、発しても気と雜らない（理発の）ため、性の本善を保全することができ、みな善である。七情はそれに反して、外部の形気を感じて発し、理の本体が発するものではない（気発の）ため、善悪ははまだ定まらない。四端七情は従りて来るところが違うのである。

李滉は約1年後、奇大升の批判をいれて前テーゼをいくぶん修正した（答高峰第二書）。「四端は理が発して気がこれに随い、七情は気が発して理がこれに乗る（四端理発而気随之、七情気発而理乘之）」がそれである。だが李滉が自説を修正したことは事実ではあるけれども、それはしよせん表面的な修正にすぎず、理気互発を堅持することは依然としてすこしも変わらない。

李滉の四端七情論で注意すべきは、理気互発と表現することができると主張しただけであって、この時期にはいまだ、理は有為とか、実際に理発があるとは断じていないことである。李滉が思考を1歩進めて「理に動靜あり（理有動靜）」と主張するには、10年後を待たねばならない。

〔理到説〕 李滉は宣祖3（1570）年、死の2か月前（10月）、『大学』経1章の「物格」について、奇大升の意見をいれて幡然と旧説を改めた。理に能動を認めるいわゆる理到説がそれである。

『退溪集』卷18答奇明彦別紙は理到説をこう記している。すなわち、

だが朱子は「理には必ず用がある。何ぞ必ずまた（『大学或問』「其用之微妙」について）心の用と説く必要があろう」ともいう（大学或問・小注または語類・巻18）。しからばすなわち、「理の用は人心の外にあるわけではない」が、理用の微妙たるゆえんは、まことに理（物理）の発現であって、人心の至るところに随い、到らざるところはなく、尽くさざるところはない。ただ自分自身の格物に至らないところがありはしないかと恐れるのみであって、理が自ら到ることができないなどと憂う必要はない。とすれば、「格物（物にいたる）」とは、もとより己が窮めて物理の極処に至ることをいうであろう。また「物格（物、いたる）」とは、物理の極処が己の窮めるところに随って到らざるところがないこと、と説明することができるであろう。すなわち、情意がなく造作がないのは、この理の本然の体であり、その寄寓することによって発現し、到らないところのないのは、この理の至神の用である。以前はただ本体の無為のみをみて、理の妙用の顕行を知らなかったので、理をほぼ死物のように認定していたが、これではその道を去ること、また遠甚ではなからうか（然而又曰理必有用、何必又説是心之用乎、則其用雖不外乎人心、而其所以為用之妙、實是理之發見者、隨人心所至、而無所不到、無所不尽。但恐吾之格物有未至、不思理不能自到也。然則方其言格物也、則固是言我窮至物理之極處。及其言物格也、則豈不可謂物理之極處、隨吾所窮而無不到乎。是知無情意造作者、此理本然之體也。其隨寓發見而無不到者、此理至神之用也。向也但有見於本体之無為、而不知妙用之能顯行、殆若認理為死物。其去道不亦遠甚矣乎）。

李滉によれば、「物格」とは、物理が人の格るところに随って自ら発顕し、到らざるところのないことを意味している。李滉にとって、理は死物でなく、運動因を備えた活物にほかならない。運動の能力をもち、能く自ら到るのである。

李滉の心学は、人間感情のもつ道德性の解明を第一義におき、体認拡充省察克治を重んじ、倫理的な傾向が強いが、理発や理到を説いて性（理）の意義を強調するのは、まさにその倫理性を特に重んじるところに原因があるといえることができるにちがいない。

3.1.2 李珥の理気論

〔理無形無為説〕 李滉は人間の善性の証明を目的として、理気互発説をつくりあげたが、李珥の心性論はそれに反して、同じ朱熹の理気論にのっとりながら倫理的な解明よりも、むしろ本体論的ないし主知主義的な性格が強い。李珥の立論の目的は、本体論と心性論の合一にあるといえるであろう。

李珥の理気二元論は、基本的には朱子学のそれと同じである。李珥は「理気の妙」について、(a)「一而二、二而一」と説く（答成浩原論理気第二書、以下、第二書と略称）。理（形相）と気（質料）は渾然として間なく、気は理を離れず、理は気を離れず、さして二物とすることはできないが、また渾然の中にあっても、相互に雑ることなく、さして一物とすることもできないからである。

李珥によれば、理気が不相雑と不相離の性格をもつのは、(b) 理が「形而上者」で「無形無為」であり、気が「形而下者」で「有形有為」だからである（第四書・第六書）。だが理気が形而上下の関係があれば、必然的に、(c) 両者には「離合なく先後なく」、また気の「動靜に端なく、陰陽に始なし」。気には不動不静の時などありえず、理の存在のもと、かならず「一動一静」「一陰一陽」の状態にある。「太極は未だ陰陽の前に立たず」「陰陽は無始無終」の命題が成立するゆえんである。

李珥はまた（d）「理通氣局」という。「理、通ず」とは、天地万物が理（本然の妙、自然法則）を同じくし、人の理が物の理と等しいことであり、「氣、局す」とは、天地万物がそれぞれ氣を異にし、人の性と物の性が違うことである（第六書）。だが、（e）「本然者理之一、流行者分之殊」。本然の理は、理の体として純善である（理一）が、理の用にあたる流行の理（万殊の理）は、本然の理の乗ずるところの氣の不齊（清濁全偏など）に応じて、善悪が生じる。これが理の万殊（分殊）である（第三書）。

〔四端七情氣發理乘一途説〕 李珥の四端七情論は基本的には奇大升のそれと変わらない。李珥はいう。四端は七情の善一辺をさし、七情は四端の總會者である。四端はもっぱら道心に対応し、七情は人心道心を合わせたものと一致する、と（第二書）。

李滉の四端の理發、七情の氣發については、李珥は「これを發する者は氣なり、發する所以の者は理なり。氣に非んば則ち發する能わず、理に非んば則ち發する所なし。（理氣に）先後なく離合なければ、互發と謂うべからざるなり（發之者氣也、所以發者理也。非氣則不能發、非理則無所發。無先後無離合、不可謂互發也）」と断じる。天人合一を理氣論の根幹におく李珥にとって、「天地の化」はただちに「吾心の發」であり、したがって「性、發して情をなし、心、發して意をなす」については、「氣發理乘」以外の解釈はありえない。

すなわち、氣の發動（氣發）は、氣に内在する働き（機）がしからしめたものであって、それを命じた何者かがあるわけではない。氣の動は、理が動かしたのではなく、理が動の機に乗ったにすぎない（理乘）。發するのは氣であるのに対して、理は發するゆえん、氣の機に乗ずるもの自体を意味している。「理無為而氣有為」であれば、天地の化であれ吾心の發であれ、すべて例外なく「氣發理乘」とならざるをえないのである。

3.2 論理的整合性の飽くなき追求

宋時烈は李珥→金長生の嫡伝としてその学術・理論を継承した。したがってその本体論的な思想フレームワークにのっとって李滉説を批判するところも少なくない。だがそれのみではない。論理上の問題点や誤謬を發見すれば、如何に些細であろうとも、李珥であれ金長生であれ容赦なく批判した。そのことは自らが崇める朱子説についても同様である。

3.2.1 李滉説の批判

宋時烈は李滉学を「最も無弊となす」と貴び、学的遺産を利用して多数の朱子学基本書を著したが、一方で徹底的にその誤謬を批判した。著作としては「退溪四書質疑疑義」（1677）などがその典型である。李滉門下の四書解釈を引き、逐一それに批判をくわえている。だが最も鋭い批判といえば、以下の理到説批判と互發説批判であろう。

〔理到説批判〕 李滉は理を体、氣を用としながら、また理を体と用にわけ、理の体は「無情意造作」であるが、理の用は運動因をもち、能く自ら到るとした。李滉独自の二体二用説である。

宋時烈の批判は単純明快であるが、李滉説の肯綮をえぐってやまない（宋子大全・卷122・答或人）。すなわち、「理の体はすでに、情意造作がないのであれば、理の用はどうして独り情意造作あるをえて、能く自ら到ることができるのか（理之体既無情意造作、則其用安得独有情意造作而能自到乎）」と。

宋時烈はまた、朱子の命題「理は物に在るといへども、用は実に心に在る（理雖在物、而用實在心）」や「理の体は物に在り、理の用は心に在る（理之体在物、而其用在心）」を解釈して、

朱子の意は「物理の用はもと一心の中に在る（物理之用、元在一心之中）」あるいは「物を処する所以の道は心に在る（所以処物之道在心）」ことであるが、李滉はそれを「理は必ず人の格を待ちて、然る後に来到する（必待人格之然後来到）」あるいは「物理を体と用にわけて、体は彼におき用は此におく（物理分体用、体在於彼而用在於此）」と誤解するという。

〔互発説批判〕 宋時烈は「朱子言論同異考」（宋子大全・巻130）の中で、李珥説を引いて李滉の四端七情理気互発説を批判した。以下の論理は、宋時烈によればいずれも李珥にもとづくものである。

宋時烈はいう。李滉立説の根拠は、朱子の語録「四端是理之発、七情是氣之発」にあるが、朱子の意は、四端が純善で氣を雑えないため、理発といい、七情が不善を雑えることがあるため、氣発というのであろう。だが実際のところ、（1）七情のうち、舜の喜や文王の怒などは、明らかに純善の情である。（2）『礼記』『中庸』は七情を統言するが、そのばあい、七情はみな性すなわち理より出たもの（理発）にはかならない。（3）孟子は七情中より純善のそれを抽出して、四端と命名した。以上3則は、朱子語録の主張と明らかに矛盾している。朱子の語録は、記者の誤記の可能性が高い。

またいう。李滉「理が発して氣がこれに随う」の1句は、誤謬もはなはだしい。そもそも理は本質的に情意運用造作がないものである。理は氣中にあるゆえ、氣が能く運用作為して、理がまたそれに賦す（天賦として乗る）——「氣が発して理がこれに乗る」にすぎない。『中庸』首章の朱子章句「天は陰陽五行をもって万物を化生す。氣はもって形を成し、理もまたこれに賦す（天以陰陽五行、化生万物。氣以成形、而理亦賦焉）」をみれば、そのことは自明であろう。

またいう。李滉理発氣隨の誤謬は、太極説からすれば、尤も曉然であろう。太極は陰陽に乗って流行するとはいうが、陰陽が太極に乗って行くとはいわないからである。事実、朱子は「太極は本然の妙、動静は乗る所の機であって、動静がすなわち陰陽である（太極者本然之妙也、動静者所乘之機也。動静即陰陽也）」とのべている（太極図説解）。

3.2.2 李珥説の批判

宋時烈は李珥の嫡伝であるが、謬説が李珥にあれば断乎としてそれを主張し、一切容赦しない。真理以外は奉じないかのごとくである。

〔四端純善説批判〕 宋時烈による李珥の四端純善説批判は『心経附注釈疑』巻2や「朱子言論同異考」「退溪四書質疑疑義」などにみえるが、「退溪四書質疑疑義」が最も詳しい。

宋時烈は「退溪四書質疑疑義二」孟子公孫丑四端においていう。李珥の四端七情論は弁論がはなはだ詳しいけれども、七情中、節に中る（中節）ものを四端ととらえるところは論理的に正しくない。朱子は「惻隱羞惡にも中節と不中節がある（惻隱羞惡、也有中節不中節）」と明言し（語類巻53）、四端にも不中節者があると主張しているからである。

宋時烈はつづけていう。『中庸』『孟子』をあわせみれば、七情四端はみな性から出たものにかならない。朱子は「仁は自ずからこれ性である。だが愛の理でもあって、発出すればまさに惻隱がある（仁自是性。却是愛之理、發出來方有惻隱）」という（語類巻53）が、これは四端七情合一の意を示している。李珥はその発出のとき、理が氣に乗って発するとし、四端は氣に掩われないため理の発といい、七情はあるいは氣に掩われて直遂できないため氣の発という。だが実際には、四端の不中節者もまた氣の発であって、七情の中節者も理の発である。論理が画一ではない。

またいう。李珥説の非は『中庸』のみによっても明らかである。『中庸』は（1）第1章首

句に「天命の性」をいい、(2) 序文に「道心は性命に原づく」といい、(3) 第1章に「喜怒哀楽の未発、これの中(性)という」という。いずれの性(性命)も、意味するところは同じである。とすれば、道心が性より出るだけでなく、喜怒哀楽も性より出る(理発)と理解しなければならない。だがその性より発する喜怒哀楽については序文に明言があり、「人心は形氣に生ず(氣発)」という。相互に矛盾している。

宋時烈の結論はこうである。すなわち、四端七情はみな性より出るが、どちらにも中節と不中節がある。その中節者は道心の公であって、その不中節者は人心の危である。四端の中節者を拡充すれば四海を保ち、七情の中節者を推致すれば万物を育てることができる。子思孟子のかつて授受するところは、その揆が一である。

「朱子言論同異考」においては、宋時烈は同じ命題をこう説明している。すなわち、四端にも不善がある。その理由は、四端もまた氣が発して理がそれに乗るためである。感情が発動するとき、その氣が清明であれば理もまた純善であるが、その氣が紛雜すれば理もまたその掬うところとなって不善に墮ちる、と。この説明は、宋時烈の四端有善不善説が李珥の修正説であることをみごとに示している。

3.2.3 金長生説の批判

宋時烈は謬説があれば恩師の金長生でもすこしも容赦しない。公平に是々非々を持することは、その論述上の特色の一つに数えることができるであろう。

〔形而上下説批判〕 「朱子言論同異考」と「退溪四書質疑疑義」をあわせ考えれば、宋時烈が金長生による「形而上、形而下」解釈の疑うべき点を正確に指摘し、論理上の欠陥を克服し、金長生説を完璧にした、経緯を知ることができる。

李滉と金長生の「形而上、形而下」解釈が相異なることが、宋時烈がこの問題について考察しはじめた発端のようである。『論語』子張篇は子游の言として、「子夏之門人小子、当洒掃應對進退、則可矣。抑末也。本之則無……」とのべるが、その朱子集注は「程子曰」として「洒掃應對、便是形而上者、理無大小故也……」を引いている。李滉はその「形而上」、くわえて「形而下」に対して、「形而上、形而下」ないし「形而上、形而下」と解釈する。すなわち、「形而上」とは“形である上”ということであり、「形而下」とは“形である下”ということである。一方、金長生は「形而上、形而下」と解釈する。「形而上」とは“形より上”を意味し、「形而下」とは“形である下”を意味している。二先生の形而下の解釈は一致するが、形而上はその解釈を異にしている。

宋時烈は形而上下についてこう考える。すなわち、『易』繫辭上傳に「形而上者謂之道、形而下者謂之器」という。形而上なる者が道であり、形而下なる者が器である。また道はすなわち理であり、器はすなわち氣である。万物の形は、その理氣(あるいは道器)が妙合して凝結したところに生じるものにほかならない。宋時烈の理氣論の特徴は、理氣(道器)が形を化生することから、氣と形(器と形)をもって次元を異にした概念と分析するところにある。これを形理氣為三件事物事説(形道器為三件事物事説)という。

宋時烈は形と理と氣をそれぞれ異質の概念と分析する。宋時烈のみるところ、これこそまさに朱子が『中庸』首章註に「天は陰陽五行を以て万物を化生す。氣は以て形を成し、理もまたこれに賦す」と論じ、また『朱子語類』巻5に「形而上者はまったく天理であるが、形而下者はその渣滓(残りかす)にすぎない。形にいたっては、またその渣滓の至濁なる者である(形而上者全是天理、形而下者只是那渣滓。至於形、又是渣滓至濁者也)」というゆえんである。

朱子の命題はみなその理・気→形のシステムを示したものであり、理・気・形三者をもって分別してこれをのべるところに特徴がある。

宋時烈によれば、形理気は三件物事である。それゆえ二先生の形而上下解釈は正しくない。二先生は「形と道を二としながら、形と器を一とする（以形与道為二、而以形与器為一）」あるいは「道に於いては形に分別し、気に於いては形に混合する（於道則分別於形、於気則混合於形）」からである。すなわち、「理」は形而上の道、「気」は形而下の器、「形」は形而上下の形である以上、「形而上」を“形上（形より上）”、「形而下」を“形下（形より下）”と解さなければならないにもかかわらず、二先生は“形下（形である下）”などと主張し、そう解釈していない。宋時烈のみるところ、聖人の言は二先生の解釈のごとく「偏陂」で「臬兀」（不安定）のはずはないのである。

3.2.4 朱子説の批判

宋時烈は朱子学を衷心から信奉しているにもかかわらず、朱子説にも誤謬があることを認め、「学者窮格の事」のため、その誤謬を解消しようと試みる。「朱子言論同異考」がまさにそれである。

宋時烈の誤謬解消ないし誤謬回避の方法は、実に単純明快である。「看書雜録」によれば、「朱子説にはすこぶる初晩の異があり、また語類と大全の不同もある。一を執って、これを是としかれを非とすることはできない。おもむろに義理の安んずるところをみればよいであろう（朱子説頗有初晩之異、亦有語類大全之不同。不可執一、是此而非彼。徐觀義理之所安可也）」という。宋時烈は論理的整合性をただただ追究すべしと主張するのである。その誤謬解消法は単純であるが、効果を期待しうる確実な方法ということができないにちがいない。

〔五常不可分説批判〕 「朱子言論同異考」は朱子説にみえる数多くの論理矛盾を指摘しているが、『朱子語類』巻6仁義礼智等名義に引く五常不可分説のばあい、「恐らくは記者の誤りなり」と断じて止まない。すなわち、

『朱子語類』甘節の記すところによれば、或者が仁義礼智信について「すでに一理でありながら、また五常ともいう」ことを問うたところ、朱子は答えて「一理といってもよく、五理といってもよい。一をもって包めば一であるが、分ければ五である」という。或者はまた、分けて五となる順序を問うたところ、先生は答えて「渾然として分けることはできない」という。

宋時烈は朱子と或者の問答に対して、（1）或者は「五者先後の序」を問うたにもかかわらず、朱子の答えるところは「分」にあること、（2）朱子が「分ければ五である」といいながらもまた「分けることはできない」と矛盾することをのべていることからいって、記者甘節の誤記と断じる。また「先生平日の意をもってこれをいえば」と前置きして、生成次第は仁→礼→義→智（→信）とならねばならないと説明している。

〔意情説批判〕 宋時烈はまた、『朱子語類』巻16大学に引く意情説について、その意と情の説明が朱子の定義と矛盾することを指摘している。すなわち、

『朱子語類』巻16の伝七章釈正心修身によれば、朱子は『大学』正心章（伝七章）を論じて、「この事をなさんと欲するのが意であり、能くこの事をなすのが情である（欲為這事是意、能為這事是情）」とのべたという。記者は林子蒙である。

宋時烈は上の朱子の言説について、「これは先生前後議論とまったく同じでない（此与先生前後議論全然不同）」と批判する。朱子の定義によれば、（1）喜怒哀楽が闐然として発出するものが「情」である。情は最初に性によりて発する。（2）「意」は喜怒哀楽が発出した後にお

いて、因りてもって計較商量するものことである。こう解さなければならぬからである。宋時烈は以上の論をうけて、総じて『朱子語類』にはかくのごときところはなはだ多い。「審問して明弁せざるべからず（不可不審問而明弁之也）」と結んでいる。最後の1文は、論理的整合性の追求に血道をあげる宋時烈の面貌を彷彿とさせる言説といえることができるであろう。

3.3 朝鮮朝中期理気論の折衷総合

宋時烈は李珥の気発理乗一途説を是として、李滉以来の理気互発説を論理的に排斥する一方で、李珥・金長生ひいては朱子の理気論の理論上の不備を容赦なく批判した。李滉以来の朝鮮朝理気論の継承者でありながら、同時にその批判者、完成者でもある。

3.3.1 韓元震の宋時烈会通説と金正黙の批判

韓元震は「寒水斎権先生行状」（南塘集・巻34）において朝鮮性理学の流れを論じ、李珥の理気本体論および宋時烈の理気会通説の要旨をのべ、李珥→宋時烈→権尚夏の道統を提示している。

〔李珥の本体論〕 韓元震はいう。朱子以後、学者は朱子説によってますますその精をもとめ、剖析は精甚をきわめた。だが学説は繁になるにしたがって道体の全を傷つけた。

李珥はそのとき出て、諸家の説を一掃し、「無形無為にして有形有為の主となる者は理であり、有形有為にして無形無為の器となる者は気である。理は無形で気は有形、ゆえに理は通じ気は局する。気は有為で理は無為、ゆえに気は発し理は乗ずる（無形無為而為有形有為之主者理也、有形有為而為無形無為之器者気也。理無形而気有形、故理通而気局。気有為而理無為、故気発而理乗）」と断じ、また「これを発するのは気であり、発するゆえんは理である。気がなければ発することはできず、理がなければ発するところはない。先後もなく離合もない（発之者気也、所以発者理也。非気不能発、非理無所発。無先後無離合）」と断じた。李珥の言が一出して、二岐の論は廃れ、道体の全はまた尋究された。

〔宋時烈の会通説〕 韓元震は李珥につづいて宋時烈に言及する。すなわち、理気の説は濂洛閩閩が最も詳しいけれども、「理有動静」「理無動静」といい、「理気有先後」「理気無先後」といい、主張は一でなく相牴背する。諸説は紛々として会通しがたい。

宋時烈はそのとき出て、総じてこれを断じ、「理気はただ一にして二、二にして一なる者である。理気の説には、理（理が気を主ること）によっていうものがあり、気（気が理を運ぶこと）によっていうものがあり、源頭（形而上下の関係）によっていうものがあり、流行（理気の流行）によっていうものがある（理気只是一而二、二而一者也。有從理而言者、有從氣而言者、有從源頭而言者、有從流行而言者）」と命題化した（宋子大全・巻105・答沈明仲）。宋時烈の言が一出して、衆説の不齊が整い、窮理の士は始めてその路径をえた。これが二先生の斯道に大功のあるゆえんである。

韓元震は宋時烈の発言の趣旨についても、詳しくその意味するところを解説している。すなわち、理気は混融無間である（不相離）が、理は自ずから理であり気は自ずから気であって、またいまだかつて夾雑しない（不相雜）。それゆえ、理が気を主ることにもとづけば「理有動静」といってよく、気が理を運ぶことにもとづけば「理無動静」といってよい。同様に「理気有先後」とは理気の源頭（形而上下の関係）による命題であり、「理気無先後」とは理気の流行に

よる命題である、と⁴²。

韓元震の解釈は、同様な趣旨の発言が宋時烈の「答沈明仲」や「金榦録」（宋子大全・附録・卷15・語録）などにみえることからいって、宋時烈の意図をよく明らかにしていることは間違いない。また宋時烈を朝鮮朝中期理気論の会通者ないし折衷総合者に祭りあげてその独創性を強調し、李珥→宋時烈→権尚夏の道統に自らを位置づけていることも確かである。

〔金正黙の批判〕 だが金長生の後孫の金正黙（1739-99）は「寒水齋先生行状弁」（過齋遺稿・卷6）を著して、韓元震「寒水齋権先生行状」が後世に伝えるに足りないのみならず、権尚夏を累らすことのはなはだ大きいことを弁じて止まない。

金正黙が特に批判するのは、宋時烈会通説における独創性の薄弱さである。すなわち、（1）その「理気只是一而二、二而一者也」は朱子の雅言であり、また李珥の推説としても名高い。（2）「有從理而言者」「有從氣而言者」もまた李珥の説であって、最も成渾答書中に詳しい。（3）「有從源頭而言者」「有從流行而言者」もまた、朱子の説および李滉・金長生の論がある。したがって（4）前言の誦伝であって、宋時烈の独創とすることはできない。

金正黙は具体的に李滉などの原文を引いて論拠を提示しており、韓元震の引用文が完全には宋時烈の独創でない可能性はいたって高い。だが金正黙は同時に「宋時烈は大源を洞見しなかったわけではない。前賢の詳説があるため、別に論説を著すことをしなかったにすぎない（尤庵非不洞見大源、以有前賢之詳説、不為別著論説）」ともいい、宋時烈による大源の洞見については朝鮮性理学史上の紛れもない事実として認定している。むろん金正黙のいう「大源の洞見」とは韓元震の解釈と等しく、「理気論の会通」のことである。結局のところ、金正黙も韓元震と同様に宋時烈を朝鮮理気論の折衷総合者と理解していたのである。

3.3.2 朝鮮朝中期理気論の折衷総合

朝鮮朝理気論は李滉が一挙に理論レベルを高め、李珥が本体論的整備を行い、宋時烈がそれを完遂した。金長生の道統説は、こと理気論においても真なる命題として成立することは疑えないであろう。宋時烈は大きく（1）演繹と（2）会通の方法を併用して、朱子学体系をより精密にしその論理的整合性を追求したようである。以下、この点について分析したい。

〔演繹法〕 宋時烈は李珥→金長生の嫡伝として、朱子および朝鮮道統に連なる碩学の学説を顕彰した。宋時烈による朱子学の研究・信奉は、時として原理主義的な性格を帯びるが、総じてはきわめて理知的である。特に李珥の方法論にしたがって、本体論的命題を第一原理とし、演繹によって諸命題を導きだす。また同じ方法論をもって、朱子・李滉・李珥・金長生など先行学説の論理上の整合を徹底して追究し、少しの瑕疵も許さない。多数の批判の存在がそのよき証拠を提供している。先の3.2の記述がまさにそれである。先行研究の批判修正はとりもなおさず朱子学の体系化の徹底を意味している。

ただ先行学説の批判において注意すべきは、批判の形式である。朱子・李滉への批判は多岐にわたり非常に多いが、直に朱子・李滉を批判するのではなく、記者の誤記をもってそれを主張している⁴³。一方、李珥・金長生への批判は少ないが、直接に恩師を名指して批判している。確実な証拠はないが、道統における嫡伝と非嫡伝の相違が批判の論理にあらわれ、その形式を

⁴² 原文「盖謂理氣混融無間、而理自理氣自氣、又未嘗夾雜。故其言理有動靜者、從理之主氣而言也。其言理無動靜者、從氣之運理而言也。其言有先後者、從理氣源頭而言也。其言無先後者、從理氣流行而言也」。

⁴³ 宋時烈はあるいは実際に記者の誤記を信じていたのかもしれない。

定めたのかもしれない。

〔会通法〕 だが第一原理を違えれば、異なった論理的結論を奉じるにいたることは理の当然であろう。演繹法の欠点がこれである。李滉と李珥の理論体系が融和せず相互に対立するゆえんも同じところにある。

宋時烈は朱子学内の相矛盾する全称命題を会通法によって整合する。すなわち、既存の相容れない全称命題を条件によって区分し、複数の特称命題に変え、整合性を確保する。たとえば「理氣有先後」と「理氣無先後」は全称命題としては矛盾し両立不能であるが、前者を理氣の源頭（形而上下の関係）による命題、後者を理氣の流行による命題とすれば、朱子学体系は矛盾がなくなり整合性を保つことができる。思想史上（1）朱子自身が実際に「理氣有先後」と主張し「理氣無先後」と主張したこと、（2）「理氣有先後」が李滉互発説の理論的根拠、「理氣無先後」が李珥一途説の理論的根拠であることを考えると、宋時烈の会通の意義は明らかであろう。朱子学体系の理論的整合性を保証し、李滉説と李珥説の理論的対立を融和解消しているからである。

小結

朝鮮朝の宣祖25年、豊臣秀吉は大軍を擁して朝鮮を侵略した。倭乱という。また仁祖期には、後金（清）軍が2度にわたって侵入した。胡乱である。倭乱胡乱の戦禍は未曾有であり、朝鮮社会は大きく変容した。国土は荒れはて、国の財政も逼迫した。

宋時烈は、その倭乱胡乱後を代表する政治家兼朱子学者にほかならない。朝鮮朝後期の未曾有の国家的な危機に直面して、道学政治すなわち思想統制→朱子学一尊による危機克服を志向した。政学一致の理想をもとめて、朱子学研究に邁進した学者とすることができる。

宋時烈の朱子学研究は大きく（1）訓詁と（2）哲学（理氣論）にわかれるが、その訓詁学を特徴づけるのは李滉重視の姿勢である。『節酌通編』は『朱子書節要』と『朱文酌海』の合帙本、『朱子大全割疑』は『朱子書節要記疑』の補完本、『心経附注釈疑』は『心経質疑』の補完本ととることができ、李滉訓詁への依存をよく示している。他方、理氣論については、宋時烈は李珥の学術を李滉以上とし、李珥を強く顕彰するが、同時に会通法をもって、全称命題としては相容れない李滉説との理論的対立を融和解消し、朱子学体系の理論的整合性を保証している。

総じていえば、宋時烈は鄭夢周・金宏弼→趙光祖→李滉→李珥の学統を想定し、李滉系も李珥系もふくむ過去すべての学術研究を総合折衷して朝鮮学術を集大成しようとしたとすることができる。嶺南学派は李滉→李珥の学統を絶対に認めないであろうが、すくなくとも宋時烈が南人に先んじて学術の集大成を試みたことは否定すべくもあまい。朝鮮思想史における17世紀の重要性は好むと好まざるにかかわらず、宋時烈の学術の高みからいって認めざるをえないであろう。

Song Si-yeol's Neo-Confucianism
A Comprehensive Collection of the Academic Schools in the Korean
Dynasty in the Early and Middle Period

KAWAHARA Hideki

In the year Seonjo 25 of the Korea dynasty (1592), Hideyoshi Toyotomi invaded Korea with his large army. This war is called Woluan (倭乱). During the Injo period, the Later Jin (Qing) dynasty invaded Korea twice with his army. This war is called Huluan (胡乱). Both wars caused unprecedented damage and the Korean (Joseon) society underwent significant change. The land was devastated and government finances were strained.

Song Si-yeol is a politician and neo-Confucist representing the era after the Woluan and Huluan wars. Faced with an unprecedented national crisis in the later period of the Korean dynasty, Song aimed to overcome the crisis through political Confucianism, in other words, he attempted to unify ideology solely under Neo-Confucianism. He was a scholar who diligently studied Neo-Confucianism to achieve his political-academic ideal.

Song Si-yeol's research on Neo-Confucianism is largely divided into (1) exegetics and (2) philosophy (Li and Qi theory). What distinguishes his exegetics was his emphasis on Yi-Hwang. As "Jeoljak Tongpyeon" (節約通編) is a combination of "Jujaseo Jeolyo" (朱子書節要) and "Jumun Jakhai" (朱文酌海), "Juja Daejeon Cha-eui" (朱子大全割疑) is a supplement book to "Jujaseo Jeolyo Giui" (朱子書節要記疑), and "Simgyeong Buju Seogui" (心經附注積疑) is a supplement book to "Simgyeong Jirui" (心經質疑), this clearly reveals his inclination to Yi-Hwang. On the other hand, with regards to Li and Qi, Song Si-yeol believed Yi-I's academics were higher than Yi-Hwang's, and highly praised him. At the same time, through the eclectic method, Song Si-yeol fused and resolved the theoretical conflict with Yi-Hwang's theory which contradicted with the universal proposition, and maintained theoretical consistency of the Neo-Confucianism.

On the whole, Song Si-yeol envisioned an academic genealogy from Chong Mong-Chu·Kim Koeing-p'il to Cho Gang Jo to Yi-Hwang to Yi-I, and attempted to create a comprehensive collection of Korean academic schools that would integrate all past academic schools including Yi-Hwang's and Yi-I's schools of thought. Although the Yeongnam school would never accept the academic integration of Yi-Hwang to Yi-I, they cannot, at the very least, deny the fact that Song Si-yeol attempted to compile all schools of thought prior to Namin scholars. Regardless, as Song Si-yeol's academic grandeur was unprecedented, the importance of his accomplishments in the 17th century Korean academic field must be acknowledged.